

石波文庫

72-523-1

ファントム オブ ジ オペラ

—— オペラ座の怪人 ——

スィーニュ・エール訳
祥曲星祈作

石波書店

石波文庫

72-523-1

ファントム オブ ジ オペラ

オペラ座の怪人

スィーニュ・エール 訳
祥 曲 星 祈 作

石波書店

目次

一、	シャコンヌ	五
二、	後書き（再録にあたって）	四二
三、	オペラ座の怪人	四五
四、	後書き（一九九二年版）	七七
五、	後書き（二〇〇二年版）	八十
六、	解説	九三

解説 天野くん

シ
ヤ
コ
ン
ヌ

抱えたままで。

Prologue

通り過ぎようと思った。けれど、カミュの足はその門の前で歩みを止めていた。久し振りに聴くチェロの音と、それを奏でる白髪の老人と——何故か切羽詰まったような、その灰色の瞳。

——あれは……——

そして、彼もまたカミュを見ていた。長い年月を生きてきた彼にとつて、目の前の少年の光はあまりにも眩しかった。ことに、今朝もはや長くない命と知らされた身には。

「あつ……どうし——」

終わりまで聞かず、八十四才の名チエリスト・オリヴィエ・ラツセルはゆっくりと倒れた。苦痛の中に微笑みを浮かべ、ただ一人の友であるチェロをその腕に

「カミュ……練習に出る気、ないか？」

ミロは、宝瓶宮の石段に腰掛けて遠く町を見詰める赤毛の友に、そつと声をかけてみた。答えはない。ずつとそうなのだった。朝も、夜も。

「……ふう……。」

ミロは深い溜息をつく。カミュの性格を知っているだけに、ミロにはそれを責めることが出来なかった。無理に聞き出そうとすれば、こうして隣に座ることさえ許してくれなくなるに違いない。

——それにしても、今回はひどいな——

カミュが誰の言葉にも反応を示さなくなつてから、一週間が過ぎようとしていた。彼がこんな風に物

思いに沈むのはこれが初めてではなかったが、こんなに長々と悩んでいたことは今までなかった。

何を悩んでいるのか、それ以上に、一体ミロの呼びかけを聞いているのか否かも全く解らない中で、ただ一つはつきりしているのは、毎日誰かに会いに行っているらしい、という事だけだった。カミュはミロがそこについてゆくことを許さなかったし、またそれについて一言も打ち明けることはなかった。

ミロは、諦めたように首を振ると、天蠟宮に向けて歩き出した。

「・・・ミロ。」

「えっ？」

ミロがびつくりして振り返る。

「・・・私は人の世界で生きられると思うか？」

「カミュ・・・。」

見る者を凍り付かせるような赤い瞳が、ミロの青玉色の瞳を射る。絶句して立ち竦むミロをみとめて幽かに笑うと、カミュは自嘲気味に呟いた。

「・・・そんな筈はないな。私も・・・お前も人殺しなのだから。」

「人殺しい?! そんなこと言ったのか? カミュは・・・」

昼間の訓練が終わった闘技場の端で、ミロを呼び止めたシユラが呆れ果てたように声を上げた。周囲には、二人の会話を聞きつけた黄金聖闘士達が集まり始めている。

「一体どうしたんだろうね・・・そりゃ、カミュはもとから争いの嫌いな子だったけど。」

「何か勘違いしているとしたか思えんな」

アルデバランが腕を組みながら唸る。

「何にしても、ですよ。聖闘士を人殺しよわばりしたなどと教皇に知れたら——」

「ああ、全く、よりによつて黄金が、だ。あいつ、自分の立場分かっているのか? もっともそれ以前に、この一週間の無断欠席だって、相当やばいが・・・」

「・・・待ってくれよ!」

思わずミロは声を荒げて怒鳴っていた。

「カミュだってそんな事ぐらい十分分かってるさ！

俺達が殺生する為に存在する訳じゃないってことも、

女神や教皇の使命の重大さも！ ただ・・・カミュは

もつと普通に生きたかっただけなんだ・・・」

俯いて、ミロは押し黙る。しんと静まり返った中で、

シヤカの声が響いた。

「・・・甘いな。」

「ああ。カミュはなまじ小さい頃が幸せだったから。

俺達はそんな生活を願おうにも、普通の生き方さえ知らない」

デスマスクの皮肉混じりの声を聞きながら、ミロは

もう一度カミュの瞳を思い返してみた。身も心も切り

裂くような、冷たい瞳。・・・あの刃は一体誰に向けて

られたものだったか。

「・・・願いなんかじゃないさ。絶望してる。望むことを捨てて・・・自分を裁こうとしてるんだよ！」

黄金聖闘士達が目を見張る中で、ミロはくるりと後ろを向くと、街を指して後も見ずに駆け降りていった。

オリヴィエ・ラッセルは一人きりで暮らしていた。

小さな庭のある、葡萄の蔓の絡んだ煉瓦造りの家で。

中に入ると、古いピアノと小さな暖炉、そして裝飾を

施した鏡の前にヴァイオリンが置いてあるのが見えた。

勿論、カミュはこの老人がどんな人物であるのか、

全く知らなかった。

——でも、私はこの空気を知っている。——

カミュの中に、はるか昔の記憶が蘇る。

——あれは、誰だったのだろう？——

毎晩のように、チェロを奏でてくれた人。自分にヴァ

イオリンを教え、暖かな生活をくれた人。息を引き取る

最後の瞬間まで、人を愛し、音楽を愛することを論

じて逝った人・・・。

彼の人と同じ白髪、チェロを弾く老人をみとめたせつな、カミュの心の奥の思い出の扉は開かれた。もう既に失ってしまった筈の、楽園への扉が。

『君は、』

意識を取り戻した時、オリヴィエ・ラッセルはまず初めにその声を掛けた。

『ヴァイオリンを弾いていたね……』

『えっ……？』

びつくりして老人を見返すカミュの瞳を、ラッセルは微笑みで受け止める。

『ああ……ぶしつけですまなかったね。でも君の指がもう一度弾きたい、と言っているものだから……』

『指が？……戯れを。』

『嘘じゃない。私には分かるよ。長い長い間、楽器と共に暮らしてきたからね……』

それから何を話したのか、よくは覚えていない。老人がオリヴィエ・ラッセルという元チェリストだということ、妻や子はいたが先立たれてしまったこと、気仮にチェロを弾いて楽しく暮らしているということ——。けれど何よりも鮮やかに残っているのは、幾つもの礼と共に差し延べられた左手だった。指先にたこのある、大きな優しい手。

——あれは、楽器を愛している人の手だ。——

彼の人もまた、同じ手をしていた。そして恐らくは、あの頃の自分も……。

——今の、私は？——

カミュは自分の手を見詰めてみる。訓練上の事故とはいえ、幾度かは人の血に染めた両の手を。

——私には楽器を奏でる資格などない。他人の命を……『心』を奪った手が、同じ『心』を奏でることなどとても——

ここ数日間、カミュを悩ませていたのはその事だった。もう還らない、二度と戻れないと思い続けてきた楽園は、失われてはいなかった。けれど自分は。

カミュだけが、こんなにも変わってしまったのだ。

「ねえ、カミュ、事故でも殺人になるのかな」

五分間の沈黙の後で、ミロは遠慮がちに訊いてみた。このごろはやっとミロの問いには答えるようになって

ていたからだ。

「……」

「え……だってさ、俺は乱暴だからついやりすぎちまうけど、お前の場合は運が悪かったとしか——」

「それでも人の命を奪ったことには変わりない。」

「うん……まあ……」

曖昧な返事を返すミロの様子に、カミュは溜息をつく。

やはり酷だろうか。こんなミロに黙っているのは。

カミュは遠くに投げていた視線を自分の手元に戻すと、呟くようにして語り始めた。

「ミロ……私は何の為にこんな所に居るんだろう……」

「何の為って……そりゃ女神の為に、だろう？」

「そんな事じゃない。人の命を奪ってまで、私は何をしようとしているのだろう、と。確かにあれは事故だった。仕方のない状況で起きたことなら、無理矢理にでも諦めるさ。しかしあの時私は何をしていた？ 武闘訓練を……人を殺す為の訓練をしていたんだ……」

「カミュ……」

「ある人の言葉を思い出したよ。『奪われるべき命など一つもない』と。でもこの理想を守ることは、ときに

命がけになる。彼は……それが相手に通じると信じて最後までチェロを弾いていた。一矢も報いずに、盗賊に短刀を突き立てられるまで。」

ミロには当然、カミュの言う『彼』がカミュの心の中に住む老人のことなのだとは解らなかつた。けれど口をはさむ気になれなかつたから、黙ってカミュの言葉に耳を傾けていた。

「女神にはそんな賭けは出来ない。負ける訳にはいかないのだから。でも、私は——」

再び、沈黙が訪れる。ミロは何とかカミュを元気づけてやりたくて、もう一度、声をかけた。

「……甘い訳じゃない。カミュ、お前は優しいだけだ。人よりも数倍も。」

「他の黄金聖闘士達が言ったのか？ 『甘い』と。」

「……まあね。でも俺はそうは思わない。」

カミュはそこでくすくすと笑うと、初めてミロの顔を見て、言った。

「彼等が正しいよ、ミロ。お前も早く私から離れた方がいい。私の甘い考えに惑わされないうちに。」

「カミュ！」

「宝瓶宮に戻る。・・・また明日。ミロ。」
 ミロは立ち尽くしたまま、カミュの後ろ姿を見詰めていた。馬鹿野郎、という小さな呟きが、風に流されて消えた。

「生きていれば君と同じくらいだ」
 ラッセルは古いアルバムを繰りながら、そう言った。

「・・・お孫さんですね。」

「ああ。娘はヴァイオリニストだったから、この子には早くからヴァイオリンを持たせていた。ごらん、ここに二人で写っている・・・いい子だろう?」

カミュはセピア色に焼けた白黒の写真を覗き込んだ。

亜麻色の髪の女性と見事な金髪の少年が、大きさの違うヴァイオリンを手にして笑っている。

「二人で協奏曲を演奏した時の写真だよ。舞台にこそ立たなかったが、二人はよく一緒にヴァイオリンを弾いていた。この子が大きくなったら、私と、私の妻や

娘の婿も加えて五重奏団を作ろう、と言っていたんだよ。娘婿はヴィオラを弾いていたし、妻はピアノが得意だったのね・・・」
 夢を見ているかのようなラッセルの眼差しが、ふっと寂しげな翳りを帯びた。

「・・・その前に、みんな逝ってしまったがね・・・」
 カミュは老人の青灰色の瞳を見詰めてから、再び写真に視線を落とした。楽しそうな、幸せそうな笑み。

カミュには羨ましかった。何故なら、かつて彼の人の家で見た女性の写真には、カミュの姿はなかったから。それでもカミュはずっと信じていたのだ。彼女が自分の母であり、彼の人が祖父であることを。

「優しそうな人達ですね。明るくて、朗らかで・・・私の友人にとってもよく似ている」

「友人?」

「ええ。同じ金髪なんです。羨ましいくらい無邪気で、いつも元気によく笑う。こんな風に。」

微かな笑みが、口元に浮かぶ。本当に知らず知らずのうちに、カミュは微笑んでいた。

「君だってそうだよ。多分。」

くすつと笑つてラッセルが言う。

「私が？」

「ああ。どんな人間でも、おどろく程無邪気な心をどこかに持つている。ただ、その表わし方を知らないだけだ」

僅かな戸惑いを赤い瞳に含ませて、カミュはラッセルを見た。老人の言葉に、言葉の意味よりも深い何かを感じ取つたので。

「——でも君は知つているね。何故それを捨てようとしていないのかは知らないが。」

——あれはヴァイオリンのことだ。——

再び眠りに付いたラッセルを横目に見ながら、カミュは鏡の前の椅子に腰掛けた。ラッセルが音楽家である以上、彼が音楽を『人の心を解き放つもの』として捉えるのは当り前のことだった。けれど。

カミュはヴァイオリンケースに手を延ばし、小さな

止め金を外した。

忘れかけていた琥珀色の輝きが視界に飛び込んでくる。十数年の長きを黙したまま、ヴァイオリンはそこに静かに横たわつていた。

——指が弾きたがつている、か・・・——

確かに、嘘ではなかった。もう一度弾きたかつた。言葉では表せないことも、音でなら表せるかもしれない。それを知つていながらこそ、カミュはもう一度奏でてみたかつた。しかし・・・

弾いたら、もう戻れない。

それが果たして自分の何処から導かれた感情なのかは判らない。しかし今のカミュは、それをはつきりと意識していた。すなわち、一度弾けば二度と聖闘士として生きる事はかなわなくなるであろうことを。

剣を捨て、あくまで音楽で人の心に訴えようとした老人。

その音楽に耳を傾けもせず、老人に刃を突き刺した盗賊たち。

相反する二つの生き方は、決して、互いに相容れることはないのだ。それが、カミュが幸せな時代の最後

に、大きな心の傷と共に思い知らされた現実だった。

やがてカミュはゆっくり首を横に振ると、艶やかな胸板に手を延ばした。指先が幽かに震えて板に触れる。とたんに、カミュはおぞましいものを見たような気がしてその手を引いた。瞼の奥に消えてゆく残像。

——何だ……？ 今のは……——

赤い色彩。夥しい紅に彩られたヴァイオリン——

——まさか……血？——

カミュは愕然として鏡台の前を離れた。自分の過去を、かつての記憶を封じようとした者がいる。

——何故なら……私が愛すべきヴァイオリンを持つたその手で、人殺しをしたから……！——

カミュは息を付くことも出来ないまま、ヴァイオリンを見詰め続けていた。思いつめたような瞳からは、いつもの澄んだ輝きは消え失せていた。

二

ミロは、丘の上で独り寝転んで空を見上げていた。

いつもならこの時間は宝瓶宮を訪ねている筈だったが、今日はそんな気になれなかった。半分は未だに立ち直らないカミュへの苛立ちで、もう半分は結局何も出来ない自分への苛立ちで。今カミュに会ったらそれを全てぶつけてしまいたいそうだから、こんなところで寝そべっているのだった。

「ミロ—— つっ！」

麓の方で、アイオリアの声がする。

「ミロ—— つ！ 返事ぐらいしろ—— つ！」

いい加減アイオリアに叫ばせた後で、ミロはゆっくりと起き上がった。

「何だよ。」

眼の前で、アイオリアが息を切らせて立っている。

「何だよ、とは何だ！ お前捜して一体どれだけ走ったと思ってるんだよ！ ……まあいい。急ごうぜ。カミュがシユラと公開試合をやってるそうだ」

「俺、行かない。」

「なっ・・・何で——」

「嫌だ。今会ったら俺、あいつに何言っちゃまうか判んねーもん。」

「馬鹿！ 教皇が来てるんだよ！ そんなこと言ってる場合か！」

教皇・・・？ 流石にミロは不安になって、アイオリアの顔を見返した。

「・・・何でわざわざ教皇が出てくるんだ？」

「俺の知ったことか。ただ御隠居が出てきた以上、何かがあることは確かなんじゃないか？」

現教皇は高齢の為、実務のほとんどをアイオロスとサガに任せてしまっていた。一日の大半を瞑想して過ごす教皇のこと、聖闘士の公開試合如きで足を運ぶ筈がない。

そう。聖衣の授与でもない限り——

「聖衣?！」

「なっ、何だっ?! ミロ！」

——まさか、カミュの聖衣を剥奪するつもりじゃ……!——

「こら、待てよ！ おい！」

考えるよりも早く、ミロは闘技場コロッセオに向けて全力で駆け出していた。

『おい・・・ちよつと変じゃないか?』

試合を見守っている聖闘士達の間から、ざわめきが広がる。

中央の円形闘技場ではシユラとカミュが対峙していた。それを、アテナ神像を背後に抱く正面席から教皇が睨み据えている。二人は聖衣をまとっておらず、そのため試合は必殺技を禁じ手に行なわれていた。しかし。

シユラが先制攻撃をかける。

「くっ・・・」

鋭い拳圧が身を切る寸手のところで、カミュは身体を

かわした。耳元で空気がうなりを上げる。瞬間、僅かに足下がふらつき、カミュは右肩に傷を負っていた。

反動で、身体が地面に叩付けられる。

「また……！」

ざわめきが一層大きくなった。アイオロスは首をすくめて立ち上がると、前方で試合を見つめているサガの方へ歩いていった。

『こんなひどい試合は見たことがないな。カミュは既に左脚もやられてる。このまま何の反撃もしなかったら、確実に死ぬぜ。』

『ああ……。とても黄金聖闘士同士の闘いとは思えないな……。——もつとも、あのシユラの攻撃から再三身を躲し続けている能力は確かに黄金級だ。』

『落ち着いているというか呑気というか……。お前、知ってるのか？ カミュが闘おうとしない理由を。』

『はつきりとは判らない。ただ、可能性のあることなら——』

わあっ、と辺りから声が上がった。中央でカミュが、脇腹を押えてうずくまっている。

「何だ?! 今のは青銅だつてはね返せる拳だったぞ！」

思わず立ち上がってアイオロスは叫んでいた。

「カミュは攻撃を仕掛けないばかりでなく、相手の攻撃をはね返す気もない、ということか……。成程、確実に死ぬな。」

サガが、指を顎の元にやって呟く。

「いいのか？ そんな悠長なこと言つてて……。まあ、教皇のなさる事に俺達が口を挿む筋はないが。」

再び席に着いたアイオロスを横目に見て、サガは改めて可能性を思い巡らしてみた。

カミュはもともと、人を傷付けることが何よりの悪だという教えを受けて育ってきている。だからこそ、カミュの育ての親を殺した盗賊たちを一気に開花した小宇宙で皆殺しにしてしまった時、同じ手で自らの命も絶ち切ろうとしたのだろう。

『この子は、見掛けよりも気性の激しい子なのかも知れない……。』

だから、サガはカミュに二つの暗示を掛けた。

一つはそれまでの生活を忘れること。

もう一つは、その生活を思い出すきっかけに近寄らないこと。

残念ながら、サガの掛けた暗示はカミュの記憶を完全に消すには至らなかった。けれど聖闘士としての教育が進むにつれ、それはさして問題にならなくなってきたのだ。

——さては、何かきっかけを掴んだな——

カミュが毎日誰かに会いに行っている、とは聞いていた。恐らくはその人物が、きっかけなのに違いない。

そこでサガはふと、昔馴染みだった一人の老人のことを思い出した。音楽好きなサガに、数々の楽器を与えてくれた人物。名前は確か——オリヴィエ・ラッセル。

——彼か・・・？——

闘技場を見詰めるサガの瞳が、深い緑に輝く。

かさついた土が、流れ続ける血を吸い込んでいく。

既に、ざわめきは鳴りを潜めてしまっていた。誰もがこの試合の異常さを感じ取っていた。吹き抜けていく風が乾いた音を立てる。

『・・・サガ、次もカミュは躲せるだろうか・・・』
『判らない。しかし躲す気があれば何とか躲すだろう』
『気があれば、って・・・どういうことだ？』
視線だけを動かして、サガはちらりとアイオロスを見た。

『躲す気さえなくす恐れがある。私の推測に間違いがなければ。』

アイオロスは天を仰いで溜息を付く。

『・・・あんまり当たって欲しくない推測だな』

『ああ・・・。』

「はああっ！」

シユラの拳が空を切る。その手を躲した勢いで、カミュは地面に両膝を付いていた。シユラの動きが一瞬止まる。

「カプリコーン！ 手を抜くな！」

突然教皇席から降ってきた声に、シユラははつとして声の主を仰いだ。

「はっ・・・。しかし——」

闘技場に視線を戻せば、カミュがまだ膝をついて荒い呼吸を繰り返している。同格の聖闘士への手加減は

確かに侮辱行為ではあった。だが、闘う気のない者を攻撃するのは、シユラにはもはや苦痛でしかなかったのだ。

——いちかばちか、本気で仕掛けてみようか。——

中途半端な攻撃では、カミュはきつとまた躲してしまうに違いない。

——そうだ。絶対に躲せない程の、鋭い拳を……！——
命に関わると知れば、カミュはきつと自分の身を守るだろう。傷つてはいても、まだ敵の攻撃をはね返すぐらいの力は持っている筈だ。

シユラは拳を握り締めると、再びカミュの方に向き直った。

「カミュ！」

その時、闘技場の観客席の一番後ろから、ひととき高く叫ぶ声が響きわたった。

「……ミロ！」

集っていた黄金聖闘士が、一斉に遅れて来たミロの方を振り返る。

「ミロ！ どこに行つてたんだよ！ カミュが……！」

アフロディーテがなじるのも聞かず、ミロは観衆をか

き分けて最前列まで駆け寄った。目を見開いて、中央で血を流し続けるカミュを見詰める。つい昨日、カミュが呟いた言葉が耳に蘇り、ミロはぞつとするような悪寒に身を震わせた。

「カミュ……死ぬ気かも知れない……早く止めさせないと——！！」

「何だつて?!」

「俺……止めてくる！」

柵を越えて闘技場に走り出ようとしたミロの腕を、アオロスが後ろから掴む。

「何で止める?!」

「ミロ……教皇命令だ」

「そんな——！！」

「ここはシユラに任せろ。今はそれしかない。」

闘技場では、シユラが最後の攻撃を仕掛ける決意をしたようだった。カミュもまた、シユラを正面から見据えて立ち上がる。

「……本当に本気でいくからな。ちゃんとはね返せよ。」

「……ああ。」

じりつ、と靴が砂を嘯む音がある。間も置かずに、シユ

ラは攻撃を仕掛けていた。

一度・・・二度。

カミュは大地の避け目を跳んで、拳を躲す。

「次・・・心臓狙ってくるぞ！」

アイオロスが拳を握り締める。

その時、瞬く程の間に、ミロは数秒先の光景を見たような気がした。心臓を狙うシユラの手刀を躲しめせず、受け止めもせず立ちつくすカミュの姿、そしてその一瞬後に広がる血の海——

「駄目だ・・・っ!! カミュ——!!」

「馬鹿! 戻れっ・・・ミロ!」

腕を振り切つて走り出したミロを、アイオロスが全力で追い掛ける。

シユラはカミュの心臓を狙いを定めた。今度は逃げ切れない。返さなければ、確実に死ぬ——

「カミュ?——」

闘いなど忘れたかのような、穏やかな表情。

「返さない・・・? しまったっ!——」

シユラは必死で繰り返し出した拳を収めようと試みた。

だが、一度放たれた小宇宙は、もはやどうすることも

出来なかった。

「駄目だ! 死ぬ・・・!——」

けれど、シユラの見たものは血の色ではなかった。

網膜を焼き尽くすかと思われるほどの閃光が眼の前で弾け、その反動でシユラは闘技場の壁に思いきり叩きつけられていた。かすむ眼でじつと前方に目を凝らす。ゆつくりと土埃が沈んでいく中で、視界に飛び込んできたのは、まばゆい程の黄金の光。

「・・・ミロ・・・」

「あ・・・」

左腕を伝う血に気づきもせず、ミロは呆然と立ち尽くしていた。自分のしたこと重さなど、考えるいとまもなかった。一歩間違えば、シユラを殺したかもしれない、ということすら——

「何をしている、スコープイオン!」

教皇の怒声が頭上から降ってくる。

「試合中の闘技場に乱入し、あまつさえその片方に攻撃を仕掛けるとは・・・女神の意志に背いた行い、罪は重いぞ!」

「は・・・はい・・・。申し訳ありません・・・」

「それからアクエリアス！」

いつになく厳しい眼差しで、教皇はカミュを見た。これまでこの老聖闘士が怒声を発したことなどなかったというのに。

「黄金聖衣は飾りではない！ いかなる理由があろうとも、今日のような闘いをして黄金聖闘士の品位を汚すことは許されぬ」

「……はい……」

闘技場の隅では、ようやくシユラが立ち上がっていた。右腕が完全に脱力している。壁に叩き付けられた拍子に、肩を脱臼してしまったのだ。

「カプリコーン、ご苦労だった」

「はっ……」

「試合は終了する。アクエリアス、スコープオン、これより両名に処分を言い渡す。心して聞くように。」
教皇の声に容赦はなかった。周囲から再びざわめきが漏れる。

「一つ。この試合はもとより、水瓶座聖闘士の様子がおかしいとの知らせを受けて行ったものである。したがって処分の内容はもはや言うまでもないが、一か月

の猶予を与えることにする。一か月後再試合を行い、その時に満足な結果が得られなければ、その時点でアクエリアスの黄金聖衣は剥奪する」

場内がしんと静まり返った。

「次。闘技場内の不法侵入者の処分について。試合中に闘技場内に侵入することは無論禁止されているが、それ以上に、対戦相手に集中している闘技者に、宣告もなく攻撃を仕掛けることはもつとも危険かつ卑劣な行為であり、女神の聖闘士の資格なしと見る。したがって、スコープオンの処分は聖闘士の称号の剥奪とする！」

カミュが弾かれたように教皇を見上げる。

『何だって……？』

堰を切ったようにざわめきが広がり始めた。称号を剥奪されたら、二度と聖闘士には戻れないのだ。

——おかしい。称号剥奪なんて、いくら何でも厳しすぎる……！

「待って下さい！」

先の不安を思う間もなく、アイオロスは立ち上がって叫んでいた。不敬罪？ そんなもの……くそくらえだ！

「ミロはまだ十五才にも達していません。むしろ咎められるべきは、彼を制止できなかったこの私です。：：：どうか、ミロにも猶予を下さい。その間、私が責任を持つて謹慎を守らせ、二度とこのような真似をしないよう再教育します！」

しばらくの間、誰も口を利かなかった。息詰まるような睨み合いが続く。けれどその時、ふと教皇が笑ったような気がして、アイオロスは少したじろいだ。教皇・・・わざとやっている？

「——それでは私はカミュを預かることにしましょう。ミロが大罪を犯したことの責は、どうやらカミュにもあるようですから。」

アイオロスに軽く目配せをして、サガが並び立つ。意外にも、教皇はあっさり二人の申し出をのんだ。「分かった。サジタリアス・ジェミニの兩名に任せる。」

——他の者はすぐに本来の日課に戻るように」

哑然とした表情で黄金聖闘士達が見守る中、教皇は来た時と同じゆっくりとした足取りで闘技場を後にした。残ったのは、祭の終わった後の静けさのような、奇妙な静寂。

「・・・見事にのせられたな。ただでさえ君は仕事が多いのに・・・。教皇も酷なことをなさる」

サガがくすくすと笑いながら、アイオロスを流し見る。

「・・・そうと分かかってわざと引つかかるお前程、いい性格はしていないんでね。のせられやすいんだ」

投げ遣りな口調でそう返しながら、アイオロスはお人好しもそう悪くはないな、と秘かに思った。

「ミロ！ 良かったな・・・！」

「あ・・・うん・・・」

集まってきた黄金聖闘士達になおぎりの返事を返しながら、ミロはサガに支えられてやっと立っているカミュを見た。傷はかなりひどく、縛った傷口からはまだじわじわと血が溢れ続けているようだった。

無理もない。手加減していたとはいえ、あのカプリーンの拳圧をまともに受けたのだ。

氣遣わしげな視線を親友に投げ続けるミロに、シユラが背後から声をかけた。

「……ミロ。」

「……シユラ!!」

やっと自分のしたことに思い当たり、ミロが弾かれたように後ろを振り返る。土埃にまみれたシユラが、ムウに支えられて立っていた。

「あ：あの……本当に悪かった！ 頭ん中真つ白になっちゃまって……力の加減とか全く考えられなくなつて……」

「いい。もし加減してたら、お前が吹っ飛んでた」

「え……?」

「ちよつと動かないで下さいよ。すぐに済みますから。」心配そうな顔をしていたわりにはぶつきらぼうな手つきで、ムウが脱臼した肩を継ぎ直す。いてて、と呟いてから、シユラは続けた。

「……本当に本気で仕掛けたんだ。カミュがまともな攻撃を仕掛けなけりゃ、いつまでたつても教皇のお許しは出ない。そう思ったから……ありや、決まつてたら聖^{エクスカリバ}剣だ。禁じ手を使つたつてことでは、俺だつてお前と同じ規則破りさ。でも——」

シユラは人垣の向こうのカミュを見る。

「正直言つて、感謝してるよ、ミロ。カミュの奴、最後の最後まで反撃しようとしなかった——」

「ああ……。」

ミロもシユラの視線を追う。カミュは、ミロの方に背を向けたままだった。

「さあ、もういいだろう。みんな自分の日課に戻れ。俺も教皇に大見栄え切つた手前、お前の面倒見なきゃならんからな」

アイオロスがミロの頭を小突く。ミロは消え入りそうな声で、ごめん、と謝った。

血の香りが、風に洗われて消えてゆく。ふと背中に視線を感じてミロは後ろを振り返つた。見詰めているのは、カミュの深い、深紅の瞳。

やがてカミュはゆつくりと踵を返すと、サガに連れられて闘技場を出ていった。

「ミロ?」

歩みを止めたミロを、不思議そうにアイオロスが振り返る。

「……何でもない。」

同じようにアイオロスと並んでコロッセオを後に

しながら、ミロはいつまでもその瞳を忘れられないでいた。

三

「ミロに御礼を言わなくてよかったのかい？」

双児宮にカミュを連れ戻って、開口一番にサガが訊いたのはそのことだった。

「・・・ええ。」

いれたてのローズ・ティーが、甘い薫りを辺りにふり撒く。

「どうして？ ミロは君の為に称号を剥奪されそうになつたのに。」

「私は助けてくれと頼んだ覚えはありません。」

「——なかなか冷たいんだな・・・」

サガはやれやれ、というように両手を顎の下で組ん

だ。十四才、反抗したい年頃、という訳でもなさそうだが。相手がこのカミュなら。

「本気で言っているとは思えないがね。」

「どのようにとつて頂こうと構いませんが。」

「君は無理をしている。」

「・・・何故そう思われるんです？」

愚かしい問答だ、とカミュは思った。お互いに、判り切ったことを尋ね合っている。おそらくこの答えだつて——

「さあ・・・ね。指がヴァイオリンを弾きたがつているから、かな」

——な・・・！——

即座に、カミュは思考を中断せざるを得なかった。

驚愕が全身を走る。

「何故知っているんです・・・まさか——！」

「いや、君をつけて行ったことはないよ。君たちの会話を聞いていた訳でも勿論ない。」

言葉よりも鋭いサガの薄緑の瞳が、カミュの言葉を制する。

「——オリヴィエ・ラッセルは私の友人だ。いや、恩

人というべきかな……。私も君と同じことを言われた。丁度十二年前にね。」

カミュは傷の痛みも忘れてサガに見入った。この人は……。一体何をどこまで知っているのだろうか。

「聖域に来て、好きだったピアノを弾く暇もなくなった。双子座の聖衣を得て、自由に外に出られるようになった。いつもピアノに手を出すことだけは出来なかった。ピアノを弾くことが何かとても不謹慎なことのような気がしていたのでね……」

再びいつもの柔らかい眼差しに戻って紅茶に砂糖を落とすサガに、カミュが低い声で返す。

「……不謹慎です。」

「……そうかい？」

「サガ……。私は思い出してしまったのです。貴方の掛けた暗示のことを。」

しばらくの間、サガもカミュも黙ったままだった。やがて、紅茶を一口含んだサガが、静かに口を開いた。

「……すると、今日の行動はその結果、ということなのだね？」

「分かりません……。ただ私には、もう命などどう

でも良かったのです。これ以上罪を重ねるくらいなら……。私にもかつて、音楽を愛した時間がありました。けれど私はそう教えられながら……。命をもってその証を立てた人の骸の前で、罪を犯したのです。同じように楽器を手にながら、彼が敵に与えたものは『音楽』、そして私が与えたものは『死』でした」

淡々と話すカミュの真意を探るように、サガはカミュの瞳の奥を見詰めた。

「ふ……。ん……。しかし君がやらなければ、彼等はその罪のない人をも殺したかも知れない」

「勿論解っています。だから私は今ここに居る。——ただ私には許せないのです」

サガの視線をはね返すかのように、カミュはサガを見返す。

「……。何を？」

「私のような者が愛することをです。力をもって裁く行為と何かを愛するという行為は相容れない。人を殺めた手で楽器を持つことは、音楽に対する冒瀆です」

「言うね……。すると君は聖闘士であるかぎり、何をも愛さないつもりなのだね？　音楽も……。人も。」

しばらくの間、カミュは一言も発することが出来なかった。ただ一言、当然だ、と返せばいい。けれど、やつと口から出たのは別の言葉だった。

「・・・いけませんか？」

「さあ、それは私が言うべきではないな。君自身で見付けなさい。ただ・・・もし君の言うことが正しいのなら、アイオロスも私も大きな間違いを犯したことになるな」

サガの言葉の意味を計り切れずに、カミュが問い返す。

「・・・何を、です？」

「ミロを助けたことだ。彼は君を本当に想っているからね。」

「お前がザルだとは知らなかったな」

もう半分以上も空になったワイルド・ターキーの瓶を見詰めて、アイオロスが呆れたように言った。

「何となく酔える気分じゃないんだ」

十四才の少年にはいささか不似合いな台詞が、同じ

く不似合いな声で返ってくる。

「・・・何となく、ね。」

何となく、で秘蔵のウイスキーを空にされる身にもなってみろ、とアイオロスは心中で嘆いた。当のミロはさながら悩めるハムレットの如く、いつになく暗い面持で沈思している。

「・・・なあミロ、元気出せよ。今だから言うけど、

お前のしたこと、そんなに間違っただけだと思っぞ？ 幸い、シユラも大きな怪我なく済んだし・・・シユラだって、お前に感謝してたじゃないか。」

「いいよ、慰めてくれなくても。みんなが許してくれても、きつとカミュが俺を許さない。」

「カミュが？ 何で——」

お前を責めるんだ、と言おうとして、アイオロスは口をつぐむ。ミロが寂しげに笑ったのを見たからだだった。

「想像、つかない？ カミュは闘いたくなかったんだ。

闘って、人を傷付けたくなかったんだ。せつかくその決意を貫こうとしたのに、俺が代わりにシユラを傷付けた。そりゃ、怒るさ」

「・・・本当にそう思うのか？ お前」

「・・・多分。」

グラスの中の氷が澄んだ音を立てる。光が様々に弾けるのを見ながら、ミロは声のトーンを落として続けた。

「・・・本当のことを言うと、分からない。俺はカミュが好きだし、親友だと思ってる。だから、相棒が悩んでるなら何か力になってやりたい、とずっと思ってた。でも・・・やること為すこと、みんなカミュの思惑とは反対みたいだ。ものの見事にね。」

「・・・らしくないな。弱気になるなんてさ。」

「でもそうでなきゃ、あの眼の説明が付かない。」

「眼？」

夕風の滑り込む窓を閉めて、アイオロスが振り返る。

「もう来るな、って言った。近寄るな、ってね。」

帰り際に自分を見つめた赤い瞳。吸い込まれそうな程に深い赤——

「・・・ま、お前程カミュを知らんからよくは解らんが」

アイオロスは空になったグラスになみなみとワイルド・ターキーを注いで、にっと笑った。

「あいつきつと、俺達程単純じゃないぜ。きつと今ごろ、

自分でも訳判んなくて悩んでるだろうよ」

「君がいなくなったら後を追いかねない程、君を大切に思っているから。」

サガはゆつくりと、そう付け加えた。ソーサーに置かれたティーカップが、かちゃん、と小さな音を立てる。

「後を追うなんて・・・聖闘士にそんな事は許されないでしょう？」

「そう。許されない。だからもし君がいなくなったら、ミロは一生苦しみ続けなければならぬことになるな」

「そんな・・・ただの空想だ。」

「違うね。人を愛するというのはそういう事だ。何かを大切に思う心があるかぎり、どうあがいてもその想いからは逃げ切れない。」

「だったらなおさら！」

カミュは思わず声を上げていた。

「聖闘士は何をも愛するべきじゃない！ 自分が斃さなければならぬ敵の前に、彼を斃せば誰かが苦しむなどと考えていて闘えますか?! 人を愛することを知っている身で・・・人の命を奪えますか?!」

「やらなければなるまい。愛するものを持つまいが、使命は果たさなければならぬという我々の宿命に変わりはないよ」

カミュは返す言葉を探して手元を見詰めた。そう。そんなことはとづくに判っていたことなのだ。だから自分は、音楽も人も愛すまい、と決めたのに――。

――それなのに何故、こんなにも新鮮に聞こえるのだろうか――

言葉は、見付からなかった。何も聞こえない、静かな夕暮れ。

「冷めるよ。」

サガの声がふんわりと広がる。カミュは徐に手を延ばすと、冷めかけた紅茶に小さな角砂糖を二つ落とした。スプーンとカップの立てる音だけが、夕日の差し込む部屋に響く。

「――わざと離れようとしたね。これ以上ミロに危険

を冒させないために。」

まだ少し湯気を立てている紅茶の液面に視線を落としましたま、カミュは幽かに、そしてゆつくりと頷いた。

四

「町外れの家に、この手紙を届けてきてくれないか?」

「俺が?」

ミロは机の上に投げ出された手紙を手にとってアイオロスを見た。

「謹慎中なのに、聖域の外に出てもいいのか?」

「本当は良くない。だがお前くらいしか暇な奴がいない」

「ちえっ・・・」

ミロは手紙の宛名書きを見た。青い封筒にブルーブラックのインクで記されている。

『Sir Olive Lassel』

差出人は、サガになっていた。

「・・・手紙ならポストに放り込みや済むものを・・・」

「大切な手紙なんだ。ちゃんと彼が受け取るのを見届けてきてくれ」

そう言つて、アイオロスは意味あり気に笑つた。

それは、何かしら懐かしいような親しみのわく家だった。ミロはいい加減長い間その家を見詰めてから、ゆつくりと古びたドアを押した。

「こんにちは！ 聖域からの使いの者ですが・・・」

返事はない。カーテンを閉めたままの部屋の中は予想外に暗く、静まり返っている。

「・・・留守ですか？」

留守ですか、という訊き方もないな、とミロは心中で思った。そういうえば昔、『欠席者手を上げろ』っていう冗談が流行つたっけ。

下らない想像を察してか否か、暗がりの中で風が動

いた。

——人がいる・・・？——

暗い人影がゆつくりと部屋の中を横切っていく。次の瞬間、カーテンをひく音がして、家の中に光が差し込んでいた。

「・・・済まなかつたね。ちよつと眠っていたものだから・・・」

優しい青灰色の瞳をした白髪の老人が、窓際に立っている。

「あ・・・いえ、こちらこそ・・・急にお邪魔してすみません」

ラッセルは、戸口で立ち止つたまま狼狽しているミロを、じつと見詰めた。

「・・・そうか・・・君が、あの——」

「えっ・・・？」

「憧れの人だね？ カミュの。」

「カミュ?!」

バキツ、と凄まじい音がした。ミロが握つたままだったドアの取っ手が、力を込めたたとんに折れたのだ。

「うわっ・・・どうしよう・・・済みません！ ちゃん

と直しますから——」

必死で取っ手とドアを見比べるミロを見て、ラッセルはくすくすと笑う。

「構わないよ。もどから壊れていたんだ。——それより、聖域からの使いというのは？」

「あ……そうです。実はある人から手紙を——」

ミロは恐る恐る家の中に入ると、青い封筒を手渡した。

「わざわざ持ってきてくれたのかい？」

「ええ……まあ。何でも、大切な手紙なんだそうです」

「どうも有難う。——ああ、サガからだ。久し振りだな……」

ラッセルはその場で封を切り、手紙に目を通してみる。中には、話したいことがあるから数日内に邪魔しても良いか、といった内容が書かれてあった。わざわざ人を使って届けさせる程の文面でもない。

——するとサガは、この古いぼれを後輩の教育に使うつもりなのだな？——

ほのかな笑みが、ラッセルの顔に広がる。

「良かった……悪い内容じゃなかったんですね。大

切だつて言うから、どんな手紙かと……。」

ミロは何気なく笑つたつもりだった。けれどラッセルが、ミロの顔を見てあまりにも愛おしそうな表情をしたから——内心面食らつた。

「——成程……カミュが焦がれるのも無理はないな……」

「カミュの事を知つてる。貴方ですね？ カミュが毎日訪ねていた人というのは。」

「そうだよ。もつとも私は彼が何者なのか、何故毎日のように私の世話をしに来てくれていたのか、全く知らなかった。訊かなかつたから……。でも、君に会つてやつと解つた」

そこでラッセルはちよつと真面目な顔になつて言つた。

「気を付けなさい。君はカミュの心に鍵をかけているのかも知れない。」

ラッセルは終始微笑みを絶やさなかつた。ミロがドアの取っ手を折つた時も、お茶を入れてくれた時も、

使いの札にと、つみたての葡萄をくれた時も。ただ一度、ミロにあの忠告をした時を除いては。

『君はカミュの心に鍵をかけているのかもしれない』
何故彼はその一言を、会ったばかりのミロに告げたのだろうか？

ミロの落ち込み方は並ではなかった。何とか話は合
わせていたが、何もかもがどこか上の空だった。

——サガに伝えてくれて言っていた。何だっけ——
いまだ正常な回転速度を取り戻していない頭で、ミロ
はぼんやりと思い返す。全く、あんなに幾度も念を押
されたのに。

——ああそうだ。なるべく早く来てくれて言っていた
んだ……——
招待の決まり文句ではなく、本当に待ち遠しそうだった
微笑み。きつとよほどの親友なのだろう、とミロは
思った。
——不思議な人だな。一般人なのに、聖闘士と友達な
んてさ——

大抵の一般人は聖闘士に対し畏怖の念を抱く。ど
ちらに転んでも、それは親友などという思いからは程

遠かった。ラッセルが何故サガやカミュと知りあうよ
うになったのか、ミロが知る筈もなかったが、ただ彼
が異端者を受け止め得る人物だということだけは分
かった。そしてそれ故に、ミロには先程の言葉が痛かつ
た。

——全部見抜いているのかもしれない。何となく神
懸つてたから。最初だって、何の気配も——
ミロの足がはたと止まる。

——ちよつと待て、何で何の気配すらも感じなかつた
んだ?!——

人は誰しも、その存在を表わす『気』を持っている。
まともな人間相手に、黄金聖闘士であるミロがその
『気』を感じ取れない筈がないのだ。……そう、その
人間が死にかけてでもない限り。

別れ際に幾度も念を押しながら自分を見つめてい
た、切なささえ感じさせる瞳。

「そうか……彼には……もう時間がないんだ！」
ミロはきつと前方を見詰めると、一目散に聖域へ駆
け戻っていった。

「カミュ！」

けたたましい叫び声とともに、双児宮にミロがなだれ込んでくる。

「カミュ！ 居ないのか」

サガはペンをインク壺に戻すと、入り口の方に顔を向けた。

「おや、ミロ。お使い有難う。ちゃんと渡してくれたかい？」

「サガ、そんな悠長な事言ってる場合じゃない！ ラッセルは・・・今年幾つだ?！」

「幾つって・・・たしか八十四才だと思ったが・・・」

ミロは平然と答えるサガを睨めつける。

「・・・あなたにしては迂闊だったな。そんな高齢の老人を一人きりにしておくなんて！」

「ミロ、それは——」

「早く行ってやれよ！」

サガは先を続けようとした口を閉じた。もう既にミロが双児宮を飛び出していたからだ。カミュに重大な

ことを伝える為に。

「——もつとも、言ったところで分からないだろうが・・・今のミロでは。」

眩きが、寂しげな響きを帯びて部屋に広がっていく。

「カミュ！」

カミュは久し振りに聞いた懐かしい声に驚いて、後ろを振り向いた。

「ミロ・・・」

ミロは言葉に詰まってカミュの瞳を見詰める。怖かった。カミュが大切な人の危急を知って、絶望的な表情をするのが、おそらくは、ミロよりも大切な人の——

「カミュ・・・あの——」

戸惑うミロを、カミュは無言で見詰め返す。

——何を考えているんだろう。時間がないっていうのに！——

ミロは揺らぐ心を叱咤して、再び切り出した。

「落ちて聞いて聞いて欲しい。サガの使いで、ラッセル

の所に行ったんだ。そしたら——」

カミュの瞳が見開かれる。

「もう……気配が殆ど感じられなくなつてて……」

ゆつくりとカミュの表情が凍り付いていく様を、ミロは諦めにも似た思いで見詰めていた。ミロにはもう十分に分かつていた。この数か月間、カミュを支えてきたのが自分ではない事ぐらい。ミロが何も出来ずにいた時に、唯一カミュの心に触れた人。『安らぎ』というミロにはなかつたものを与え得た、あの老人こそが、寄るべきものを見失つたカミュを支え続けてきたのだ。

——それならせめて、良き協力者になりたい……

ミロは真直に向き直ると、慰めるように言った。

「行つて来いよ、カミュ。ラッセルはきつと待つてる。」

「でも……私は謹慎中だ」

「大丈夫だよ。サガも行つてる。……きつと許してくれるよ。……だつて……行きたいんだろ？」

カミュが微かに俯く。

「……彼……いい人だよ。カミュが惹かれるの、当然だと思ふ。彼は……俺にはないものをたくさん持つ

ているから——」

カミュはゆつくりと顔を上げた。ミロ……何を言おうとしている？

「きつと、本当の親友になれるよ。」

カミュには何も言うことが出来なかつた。これは自分が望んだ結果なのだ。ミロを自分から引き離す為に。少し青ざめたカミュをいたわつて、ミロが優しく言う。

「まだ死ぬつて決まつた訳じゃない。お前が行けばラッセルも元気になるかも知れない。……元氣出せよ。」

それは、カミュが一番好きだつたミロの微笑みだつた。カミュは、見ることの辛さに瞳を閉じた。こうなることを望みながら、心のどこかでその日を恐れていた自分。

——でも、もう恐れる必要もない。——

ミロは、自由になる。カミュは、ミロが『親友』でありたいが為に払つた犠牲の数々を思い起こしてみた。誰の眼から見ても明らか程に、いつもカミュのことを一番に考えていたミロ。カミュは、もうこれ以上、ミロが自分の為に見つたのを見ていたくはなかつ

たのだ。

「・・・有難う・・・行つて来るよ・・・」

小さな声でカミュが呟く。ふと、カミュはその言葉に違和感を感じた。思えば、ミロとの会話で行つて来いと言われたことも、行つて来ると答えたこともなかったのだ。そんなことを言わなくとも、いつも二人は一緒だったのだから。

二人はそのまま何も喋らずに、静かに別れた。色褪せた陽光が、冬の訪れを告げていた。

五

シヨパンの前奏曲が聞こえる家の戸口を、カミュは静かに開けた。ふと演奏が途切れる。

「やあ、来たね。カミュ。ラッセルがずっと待っていたよ・・・」

ラッセルはまた発作を起こしたらしかった。苦しくて、時々息も出来なくなる、と彼はそう言った。

「実はね：君に助けてもらった時、既にもう末期だったんだよ・・・医者に言われていたんだ。今度発作が起きたら覚悟してくれ、と。」

苦しそうに胸を押えたまま、ラッセルは弱々しく笑う。

「そんな・・・！」

「でも、君のおかげでこんなにも長く生きられた」

「弱気になつたら駄目です！ 未だ貴方は・・・こうして生きているのに！」

震える手を握り締めるカミュを、ラッセルは慈しむような瞳で見詰めた。

「・・・いいんだよ・・・カミュ。私は十分幸せだった。君は私に、夢を見せてくれた。そしておそらくは君も・・・そうだろう？」

ラッセルの言葉に、カミュがゆつくりと頷く。

「幸せな夢を見ることは・・・先の短い年寄りには良いことだよ。けれどね、カミュ・・・君みたいに若い

子には、時折それは大きな障害になる」

「・・・障害・・・？」

「幸せな時代の記憶に縋って生きることは辛いことだから。人は・・・そんな記憶を思い出ししてしまうことで、初めて一步を踏み出せるんだ・・・」

カミュは何も言えないままラツセルの顔を見た。ラツセルは気付いていたのだろう。カミュが彼に、他の誰かの面影を重ねていることに。きっと、サガに言われなくとも――。

「分かつてはいたんだが・・・つい一日、一日と延ばし続けて、こんなにも長い間君を犠牲にしてしまった。もう十分だよ。君は元の生活に戻らなきゃいけない。・・・待つてる人が居るんだろう？」

「いいえ！」

カミュは強く首を横に振った。

「・・・私にとつても・・・貴方は最後の夢でした。・・・もう私には慈しむものなんて必要ないんです」

「・・・カミュ？」

驚いたような瞳で、ラツセルが見返す。

「先日、教皇からお叱りを受けました。私が闘おうと

しなかったからです。私はどうしても決断を下さなければならなくなつてしまいました。これからも聖闘士として生きるのか、それとも死んで聖域を下りるのか――」

サガはピアノの椅子に腰掛けたまま、黙つてカミュの言葉を聞いていた。口を挿む必要はなかった。

「私は・・・決めたのです。聖闘士として生きる事を。だから――もう何も要らないんです」

「カミュ・・・君には守りたいと思うものはないのかい？」

「え・・・？」

ラツセルはまるで自分の孫にするように、カミュの髪に指を差し入れてそつと梳いた。

「・・・サガから聞いている。聖闘士と呼ばれる人が、どんな使命を負っているのかを。確かに・・・私のような一般人には考えられない程過酷な運命だね。でも私は、君には神の守護者であると同時に人の子であつて欲しいと思う。人を愛し、君の生まれたこの地球を愛する一人の人間として・・・」

「・・・。」

「君たちの行動を決定するのは最終的には正義かも知れない。でも・・・神が敵と定めたものだから守りたいものがある。愛しいものがきつとあるだろう」

「・・・だからこそ——」

カミュは目を伏せて苦しげに言う。

「解りたくないんです・・・それを知ってしまったら、きつと聞えなくなってしまうから・・・」

「でもカミュ、そんな愛さえ知らない者に討たれる人間は、なんて悲しい運命なんだろう、と思わないか・・・？」

カミュは瞳を上げて再びラッセルを見た。戸惑いに揺れる赤い色。ラッセルはもう一度カミュの髪を梳くと、胸を押えていた手を延ばしてヴァイオリンケースを取った。革の軋る音が小さく響く。

「・・・君がヴァイオリンを捨てようとした理由がやつと解った。君を育てた人の言葉に背いたことへの、贖罪だったんだな・・・」

カミュが無言で頷く。

「命を懸けて理想を守るなんて、凄い人だったと思う。でも・・・狙われたのが彼の命でなく君の命だったな

ら、果たして彼は同じ行動をとれただろうか・・・」
たとえ面識がなくとも、ラッセルにはカミュを育てた老人の心が痛い程よく解った。盗賊にだつて家族が居たかも知れない。古い先の短い自分の命と、家族を抱えた者の生活とをはかりにかけることはそう難しいことではなかった筈だ。けれど、かかっているものが自分の愛する者の命だったなら——。

「私だつたら守り抜くだろう。たとえ相手を死なせることになつても。勿論、それは人を殺めていい理由にはならない。けれど・・・お互い愛する者を守る為に闘つたのなら、どちらが倒れても許し合えるんじゃないだろうか・・・」

ラッセルはカミュの髪にやっていた手を下すと、ヴァイオリンケースの蓋を開けた。松脂の香がふわつと広がる。

「・・・娘はシャコンヌが好きだつた。神々しい曲想と秘められた情熱が、自分をとりこにするのだとよく言っていたよ・・・」

弦に延ばそうとした手がはたと止まる。

「く・・・っ」

「ラッセル！」

右手で胸を押えたまま、ラッセルは身体をくの時に折り曲げた。驚いてサガが駆け寄る。

「力を抜いて！ 息を楽に……」

サガは形の良い唇を囁んだ。もはや、サガに出来るのは痛みを止めることぐらいだったのだ。

「……大丈夫だ……未だ少し——」

不規則に波打つ息を整えて、ラッセルが答える。

「……サガ、頼みがある……」

「どうぞ、何なりと言って下さい」

「私が死んだら……ピレネー山にある妻の墓の隣に葬って欲しい。葬式も何も要らないから……それからこの家を頼む」

ラッセルの心臓に手を当てながら、サガは静かに頷いた。

「……それからカミュ、」

ラッセルはゆっくりとカミュの方に向き直って続ける。

「はい？」

「……君にはこのヴァイオリンを受け取って欲しい

んだ」

一瞬びくつとカミュの身体が震えたのが、ラッセルには分かった。何故カミュがこうまでヴァイオリンを恐れるのか。『贖罪』ではない、何か別の理由があるのに違いなかった。

「……嫌かな？」

「いえ、そんなことはありません。ただ私は——」

「弾くのが怖い？」

ラッセルはくすつと笑ってカミュを見た。明らかに狼狽したようなカミュの表情。

「ヴァイオリンは君の鍵の一つだね。もうすぐそれを開く者がやって来るよ……」

「何だ?! お前カミュと一緒に街へ行っただんじやなかったのか？」

人馬宮でくつろいでいるミロを見て、アイオロスがすつとんきような声を上げた。

「俺は関係ない。行くわけじゃないじゃないか」

「…俺はカミュの行く所にお前が行かない訳はない、
と思っただがな…。」

からかい口調のアイオロスの声にさしたる反応も見
せず、ミロは窓の外を見つめている。これは相当やば
いぞ、とアイオロスは思った。

「不景気が続いているな。カミュに何を言われた？」

「別に、何も。」

「何も言われないのに落ち込んでるのか？」

「カミュにはね。」

どこか上の空の返事。落ち込んでいるというよりは――
虚脱感の方が強いような雰囲気。

「情けないな。そんなに簡単に諦めるのか？ お

前、一体何年カミュの傍にいたんだ」

「でも…！」

ミロが振り返ってアイオロスを見詰める。

「でも、何だ。」

「俺じゃあいつのこと何一つ解ってやれない！ 六年
も一緒にいるのに…力になれないどころかあいつ
の邪魔ばかりして…。」

やれやれ、とアイオロスは思った。どうしてこう二

人とも揃いも揃って無器用なんだろう。お互い相手の
ことを思い過ぎて、かえってすれ違ってしまっている
ことに気付いていないんだから、全く始末に負えない。
「そう、とは思えないがな。まあいい。一体誰に何を
言われたんだ？」

「…ラッセルが…俺がカミュの心に鍵をかけてるつ
て…。」

「で、お前はそれを信じるのか」

「…筋は通るよ。俺が近付けば近付く程、カミュ
は口を閉ざすもんな」

「…ふ…ん。明らかに認識不足だな。」

アイオロスは戸棚の中の木箱に手を突っ込むと、小
さなナンバー式の鍵を取り出してミロの方に放った。

「…それ、開けてくれ。」

「え…何で？ ナンバー忘れたのか？」

「いや、覚えてる」

「だったら自分で開けるよ！ 六桁なんて…不可
能に近いぜ?!」

「そうだ。鍵なんてものは、本来かけた本人にしか開
けられないもんだ」

ミロがゆつくりとアイオロスの方に向き直る。つかの間の沈黙。

「…そして、かけた本人にならず開けられる——？」

「そう。開ける気さえあれば、いつだって開くさ。」

ミロは宙を見詰めた。耳に蘇る、ラッセルの言葉。

「そうか・・・だから『気を付ける』って・・・アイ

オロス、サンキュー——」

鉄砲玉のように飛び出したミロを見送って、アイオ

ロスは一人『ご馳走様』と毒突いた。

「・・・許して下さい。どうしても駄目なのです。ヴァイオリンだけは——」

「・・・そうやって、君はいつも自分を律してきたんだ

ね・・・？」

カミュは戸惑いながら、ラッセルから視線を外した。

本心を隠し通すことの空しさを、こんなにも強く感じたことがあっただろうか。

「でもカミュ、判るよ。ヴァイオリンを弾かなくなっちゃ

て。君がどんなに彼を思っているか——こうして手を握っていても、こんな年老いた私が切なくなるくらいに、伝わってくるよ。」

「ラッセル・・・」

「カミュ、自分に嘘はつけない。こんなことを続けていれば、いつか君は自分の想いと理性との間で、身動きが取れなくなる。そしてそのどちらの中にも、自分を見出せなくなるよ・・・」

カミュはヴァイオリンを手に取った。懐かしい感触が指を伝う。

「——いつか、じゃない。もう既に私は見失ってしまった——」

カミュは顔を上げると、ラッセルに静かに微笑みかけた。

「・・・その言葉をもっと早くに聞けたら良かった。」

「何故・・・。未だ間に合うだろうに——」

「いいえ！ 遅いんです・・・もう・・・ミロは・・・」

自分の元へは戻ってこない。あんな仕打をした自分を許してくれとは、カミュには言えなかった。ミロの気持ちを十分に知った上でしたことなのだから。

「私はミロをあんなんにも深く傷付けたんです。．．．いつそ憎んでくれたなら、まだ救われたのに——」

ラッセルは慰めの言葉を返そうとして僅かに顔を起こした。ふと、視線が戸口の扉に釘付けになる。つられて戸口を見たカミュの耳に、足音が聞こえた。石畳の上を駆ける、軽快な足音。それが段々と近付いて——

数秒の後に、戸口には扉の代わりに金色の光が佇んでいた。

「．．．ミロ．．．」

聞き取れぬ程かすかなカミュの声が、静まり返った部屋に広がる。

「．．．勝手に追いかけて来てごめん。．．．何も言わないでここで待ってるから．．．」

ミロはそう言つて、小さく微笑んだ。ミロはまだ信じているのだ。ラッセルこそがカミュの一番の理解者である。

カミュは弁解しようとして口を開きかけて、そのままその言葉を飲み込んだ。．．．言葉では駄目だ。その言葉で、散々ミロを傷つけた。きっと、ミロは、もうカミュの言葉を信じない。

だから、言葉はなくともそれと十分解る程に、強い思いで贖わなければ．．．。

カミュは思い切つたようにヴァイオリンを構えると、弦を合わせ始めた。朝の大気を思わせる澄みきつた音が部屋いっぱい広がる。

「カミュ．．．？」

ミロが訝しそうにカミュを見る。ミロには、今カミュが必死になつて何かをしようとしている、ということしか解らなかつた。

やがて調弦を終えたカミュが、サガの方に向き直る。

「サガ、伴奏をお願い出来ますか？」

「ああ．．．構わないよ。曲目は？」

カミュは手元を見た。ラッセルの娘が愛用したヴァイオリン。

「．．．ヴァイターリのシャコンヌを。お願いします。」

それは、もう六年もヴァイオリンに触れていない人間の演奏ではなかつた。幼い昔、指に叩き込まれたポ

ジションが、魔法のように旋律を作り上げていく。けれどそれにもましてラッセルを驚かせたのは、切ない程に美しい音色だった。神々しさと暖かさ、慎みと情熱——それらの全てが混沌と混ざりあつていて、しかもその色を失わずに内在している。恋をしている、とラッセルは思った。これは、紛れもなく恋だ。

ミロもまた、身じろぎもせずカミュの奏でるヴァイオリンに耳を傾けていた。カミュがこんなに激しい自己主張をしたことなどなかった。旋律が、握りしめた指先から、大地を踏み締める足から、全身に水のようにしみわたってくる。音の海に抱かれて、朦朧とする意識の中で、不意にミロはこれが自分へのメッセージなのだと気付いた。今まで決して手の内を見せようとしなかったカミュの、言葉にさえ飾られない想い。

だからこそ、ミロには言葉を返すことが出来なかった。演奏が終わり、最後の余韻が消えた後も。

溜息さえ付けない、無音の空間。

その時、ふっと気配の一つが途切れた。全員が、弾かれたようにラッセルの方を見る。

「・・・ラッセル！」

驚いて駆け寄ったカミュに、ラッセルは弱々しい微笑みを返した。二つの青灰色の瞳には、うつすらと涙が浮かんでいる。

「・・・君は・・・すごいね・・・こんな演奏は初めて聴いたよ・・・」

「ラッセル・・・貴方のおかげです」

「・・・カミュ・・・ヴァイオリンを大切にしてください・・・君の思いを・・・君を思ってくれる人の思いを大切にしないで・・・」

吐息が段々と弱くなっていく。カミュはあふれそうになる涙を必死で堪えながら、ラッセルの手を握り締めた。ミロが涙に濡れた面を逸らす。

「・・・君はシャコンヌに似ているね・・・凛としていて・・・情熱的・・・」

最後の息が、静かに吐き出される。

そしてもう二度と、ラッセルが息をすることはなかった。

Epilogue

降り続いていた雨が止んだ。

ラッセルの望んだピレネーの山奥で、葬儀はしめやかに行なわれた。白い法衣を来た神父の後について、参列者が山を下りて行く。カミュはそれを見送りながら、真新しい十字架の傍に佇んでいた。

「カミュ。」

ミロが背後から声をかける。

「……これ、持ってきたんだ。弾くかと思って。カミュはゆっくりと振り返ってミロの手元を見た。ラッセルの遺したヴァイオリン。」

「……じゃ、俺も行くから。」

ミロはヴァイオリンを手渡すと、そう言って小さく手を振った。カミュは他人に涙を見られるのを嫌う。

一人にしておいた方が良いと思ったのだった。

「……ミロ。」

数歩戻ったところで、カミュがミロを呼び止めた。

ゆっくりとカミュの方に向き直る。カミュは再びミロに背を向けて、十字架を見つめていた。

「……二度と、こんなことは言わない。次からは自分でちゃんと立ち直るから……」

カミュの声が幽かに震えている。

「……今だけ……ほんの少しだけ、ここに居てくれないか……?」

ミロはほんの一瞬だけ立ちつくすと、カミュの横に静かに並んだ。無言の時間が流れてゆく。それから戸惑いがちに手を延ばすと、そっとカミュの頭を自分の肩に引き寄せた。白いシャツに、カミュの熱い涙が染み込んでゆく。

霞む視界に浮かぶ、降り注ぐ陽光のような、優しい記憶——。

風が、まだ乾かない白い十字架を見詰めるミロの瞳から、二粒の大粒の涙を運んでいった。

後書き（再録にあたって）

この Chaconne の初出は、一九九一年になります。

九十年八月に最初の小説「Kyrie eleison」を発行した私は、その日たった一冊だけ売れたその本の読者から、大変熱心なお手紙を頂きました。それがまさしく、その後計三冊に渡って合同企画本を発行することになった、氷鏡ルーナさんだったのです。

運命の悪戯か、はたまた神の気まぐれか、我々にはヴィオラ馬鹿という共通点がありました・・・更には、「このジャンルでクラシック音楽ネタをやってやろう」という妙な情熱にも燃えておりました。お互い、こんな変な事考えてる人間は他にはいるまい、と思っていたので、同士を見つけた時の喜びたるや大変なものでした。かくして、我々はその半年後に、初の合同誌を発行するに至り、これが私の発表第二作目となったのです。

正直な話、私は彼女に出会う迄、いわゆる「ワグネリアン」でありました。ワグナー、ブルックナー、

マーラーあたりが守備範囲で、弦楽合奏は軟弱、ヴァイオリンのソロなんぞ自己陶醉の最たるものだと思っただけでした。ところが、ルーナさんに「バッハの2つのヴァイオリンの為の協奏曲とヴィタリーのシャコンヌがめっちゃええねんで〜！」と吹き込まれ、ZHEKINの朝のバロックで初めてヴィタリーのシャコンヌを聞いたとき、私の世界は百八十度転換してしまいました。「うおう!! 俺は二十年もこんなに美味しい音楽を無視していたのかッ!!」

煩惱は、さらにルーナさんから送られて来た一編の短編小説で頂点に達します。それは、カミュが、打ち捨てられたヴァイオリンを見つけた時のモノローグであって、幼い頃チェロ弾きの老人に育てられたカミュが、老人の娘の写真を見て自分の母だと思ひ込むが、今してみれば老人もその娘も自分の肉親ではなかったのだ、という追憶が始まります。私が強烈にハマッタのは、そのとき真実を言わなかった老人を責める事はできない、何故なら自分は今、彼の人が嫌った人殺しとして生きているから、という一節と、更に老人の残した、「音楽はいい。だからヴァイオリンを大

切にしない」という言葉通りに生きていけばよかったのだ、という後悔に繋がっていく部分でした。私の中に、その当時、「聖闘士である事を後悔するカミュ（もしくはミロ）」というのは存在しなかったのですね（笑。「なんか、自虐的な先生とシャコンヌってめっちゃお似合いやん!!」というわけで、先のルーナさんの短編を土台に、もう少し長い話を書くお許しをいただき、怒濤のように原稿書きが始まったわけです。

ところが、です。私は当時から、音楽にストーリーを左右される作家だったのです…。シェリングのヴァイオリン、そしてチャールズ・ライナーのピアノ…。あの清純かつ抑えても抑えきれぬ情熱のどこに、「自虐」のカラーがあるのでしょうか…。（涙）？
かくして、ストーリーは青春・恋愛・さわやかグラフィティー（古い！）な方向へどんどん突っ走っていつてしまいました。

となると、今度は、彼等の仕事（極論すればまさしく「人殺し」なのですが）に対するなんらかの結論を出さねばならなくなります。でないとおッピーエンドにならない。どうやって悩めるカミュ先生を納得させ

るか、延々悩んだものです…。（笑）。それは同時に、今までお気軽に彼等にコソコソしてた自分自身の、これまで見ないようにしていた疑問に対する決着をつけさせる作業でもありました。今にしてみれば青臭いと言わざるを得ませんが、これも青春の遺産と諦めて、今回の再録に際し、話の筋に関わる部分での加筆修正は行なっています。

実際のところ、このテーマは大変重く、私は未だにこの原点に対する再挑戦を行なっていません。これが、私が原作設定ものをなかなか書けない大きな理由のひとつになっています。ただ、このように（趣味とは言え）ものを書くようになってほぼ最初の時代に扱った「人殺し」のテーマを、やはりこの世界を去る前にもう一度扱ってみたい、とは考えています。結論はやっぱり同じになってしまうのか、それとも変わるのか、私自身、楽しみでもあります。

それにしても。やっぱり十年もたつと、キャラクターも変わってくるものですね。影のある先生はともかく、お日さまのようなミロ、これはもう絶対書けな

い（笑）!! このミロ、あのころの「こうありたい」っ
ていう（いささか現実離れした）理想が凝縮してます
ね。一週間もシカトこかれたら、フツッ怒るだろ（笑）。
そこまでいい子にならんでもいいと（今なら）思う
んだが。先生の方は、こんな風に身勝手に悩んでみた
い、っていう願望でしょうか（笑）。願望が現れてい
る方は存在感があるが、理想ばかり押し付けられたミ
ロは影がうすい・・・（涙）愛するミロ様に、今の私が、
そんなひどい仕打ち出来るわけがない！ ってなわけ
で、この後、どんどんミロは影のある存在になってゆ
くのです。では、次に影のあるミロをどうぞ（笑）。

オペラ座の怪人

第一章

プロローグ 一九九二年、パリの街角で

何時来ても綺麗な色だな、とミロは思った。秋のパリ。マロニエ並木も公園のポプラも全て黄金色の景色の中で、色とりどりの服を着けた人々が行き交っている。聖域ではいささかきつい色調に見えるカミュの髪も、こんな世界ならうまく調和するのも知れなかった。

「何を独りでやけている？」

突然、ミロの美しい幻想を澄んだ声が遮った。

「にやけている、はないだろう！ 人が折角この風景に浸ってたのに！」

些か気分を害されて声の方を振り向く。続けて文句を言おうとしてタイミングを失ったまま、一度開いた口

を再び閉じる。

目の前に、想像よりも幾千倍も美しく調和した
ルージュ
『紅』があった。

「どうした？ 今度は黙り込んで。」

「どうもしないさ！ ばかばかしくなつて反論するのを止めたただけだ！」

「それは悪かった」

カミュは僅かに口元に笑みを浮かべてミロを見た。

ミロのことを知るなら、声を聞くより瞳を見た方が余程確かであることを、カミュは知っている。

「珍しく君の方が先に来て待つていたから、ちよつとからかつてみたくなつただけだ」

「ふん！ 君がいけないんだぞ！ 必ず五分前に来て待つていたりするから・・・」

「分かった。今度から君と待ち合わせの時は時間丁度に来ることにしよう」

・・・しまった。やぶへびだ。ミロはごくりと唾を飲み込んだ。はつきり言って、ミロは待ち合わせの時間というものに間に合ったことがない。教皇などは、最近ミロにだけ一時間早い集合時刻を告げているら

しい(らしい、というの、それでもなおかつミロが集合時刻に間に合った事がないため、事の真偽を確かめるすべがないからである)。

些か見え透いた逃げ方だが、ここはどうやら話題を転じるより他道がなさそうだった。

「・・・で、何で俺を呼んだんだ？」

「見せたいものがある」

カミュがくすくすと笑いながら二枚のチケットを取り出す。

「・・・『LE FANTÔME DE L'OPÉRA』？」

「オペラ座で演るんだ。物語の舞台になった劇場でやるといのはなかなか見物だろう？それにオペラ座は見るだけでも価値があるし・・・」

「行くのか？ 君と？」

「不服か？」

ミロはあつげに取られてカミュを見た。カミュが自分から遊びに誘うなんて。

「・・・いいや、全然。」

チュイルリーの庭園を抜け、コンコルド広場からロワイヤル通りに入ると、正面からマドレーヌ聖堂の雄姿が迫って来る。

ラ・マドレーヌと呼ばれるこの教会は、その色といい形といい、ギリシャの神殿によく似ていた。ミロはしばし、その壮麗な建物に目を奪われた。

「今日は金曜日だから花市が立っている筈だ」

「ふうん・・・。パリの色にもあんな建物が結構似合うんだな」

「少々明るさに欠けるがな。あれは神殿の姿をしていてもキリスト教の聖堂だから・・・」

ミロは首を傾げてカミュを見た。どうも変だ。まるでインストラクターのように自分を引き回すカミュなんて、見たことない。

「何か・・・あつたのか？ カミュ」

「どうして？」

「いや・・・随分と楽しそうだから。」

しばしの、沈黙。

カミュは心底驚いたような顔をした。それから口元

——何だ・・・？ これは・・・！——

はつきりとした既視感がミロを縛る。

「ミロ?! 大丈夫か?!」

——何故・・・？ オペラ座に来たことは一度もない

筈——

「ミロ！」

カミュの声が、ミロの頭の中でぐるぐると渦巻く。目を閉じてもおめぐる視界の中で、ミロは地底から沸き上がる笑い声を聞いたような気がした。

第二章

The FANTOM of the OPERA

〜一八八一年、オペラ座にて〜

act.1 オペラ座の邂逅

ひんやりと冷たい感触を感じて、ミロはゆっくりと目を開けた。天井には白い月が先と変わらぬ姿で掛かっている。違うのは、ミロがオペラ座の石畳の上に寝ていたことだった。

「カミュ？」

少し高めの声で呼んでみる。すぐに足音が近づいてきた。

「起きたか、ミロ」

「・・・悪い。いきなり正体不明の頭痛に襲われて——」

「私もだ。」

ミロはびっくりしてカミュを見上げた。先程とは打って変わって深刻な、カミュの表情。

「君が倒れてから、私もひどい眩暈に襲われた。それでも何とかオペラ座まで引つ張ってきて・・・気がついたらここへ来ていたんだ」

「……？」

ミロは立って石段の端まで行ってみた。夜の風に、先刻までなかった悪臭が混じっている。汚れた水の臭い。・・・そう、まるで、下水管が壊れたような。

そして、眼下に想像もしなかったバリの街を見た時、ミロの両足はその場で凍り付いた。

「これは・・・！」

あろうことか。彼が気絶していたほんの数十分の間に、街は一変してしまっていたのだ。

「・・・どうということなんだ・・・!!」

「よく注意して見てみる。街灯は全てガス灯になっているし、あれ程ひしめいていた車の影が全くない。そ

れに——」

カミュはその先を言わなかった。彼の言わんとしたそのものが、向こうからやって来るのを見たからだった。

「……馬車！」

ミロもそれつきり息をのんで口を嚙む。一体、自分達はどんな世界に紛れ込んでしまったというのか……

「……まるで十九世紀末だ！」

「現実の、だったらどうする？」

「……俺はタイムトリップなんてしたことない。」

「……その意見には私も賛成だが、そうとしか説明の付けようがない」

これでも、ミロが気づくまでの間、カミュはなるべく正確に状況を分析しようと試みたのだ。しかし、これ程常識離れた現象が起こってしまうと、それも無意味な努力のように思えた。

「あのアポロン像を見た途端におかしくなったんだ。何だか空間ごと歪んでいくような……妙な気分だった」

「以前耳にしたことがある。我々のような能力を持つ人間は、あるきっかけで時空を歪めることもあると——」
人類の生活圏内に出て来られたのはまだ救いだつた

かも知れない。カミュは大きく息を吐いた。何とかして、元の世界に戻る方法を捜さねばならなかった。

「何にしても、取り敢えず今夜の宿を捜して——」

この時、二人はまだ現実の十九世紀に紛れ込んだことを疑ってはいなかった。二人から見ればかなり時代錯誤な格好をした一人の紳士が、息を切らせてカミュに駆け寄り、その腕に抱き締めてこう叫ぶまでは。

「クリステイー！ どこに行っていたんだ！ 二日も帰ってこないで——！」

act 2 怪人と歌姫

不覚だ。

ミロは悶々としてルイ・フィリップ調の部屋を歩き回っていた。誰も居ない、静まり返った部屋。夜の逃避行でも、この部屋には難なく辿り着く事が出来た。

ミロがバリの地理に通じていた訳ではない。彼の体が覚えていたのだ。

先刻からこつち、ミロはまったく自分の体の言いなりだった。あの紳士が駆け寄ってきた時、ミロは自分でも理由の解らないままに、咄嗟に建物の陰に身を隠してしまったのだ。

カミュがその男に手を引かれて去っていくのを見ながら。

——カミュ！ どうして……！——

声も、出なかった。小指一本さえ、ミロの意のままにはならなかった。まるで誰かがミロの身体を操っているかのように。

「くそっ！」

乱暴に置かれたブランデーグラスが、大理石のテーブルの上で碎け散る。

「落ち着け……」

息を整えながら自分にそう言い聞かせ、ミロはソファに腰を下ろした。何故カミュが『クリスティ』と呼ばれなければならないのか。そして何故カミュは彼の紳士と去り、自分は逃げてしまったのか——。

「……ん？」

誰かが歌う声が聞こえたような気がして、ミロは顔を上げた。耳を澄ましてみる。確かに、上の方で誰かが歌っている。

「歌……オペラ……？」

そうだ。自分たちはオペラ座に居たのだ。何の為に？

……『オペラ座の怪人』を観るために！

ミロはある恐怖にかられてバリの地図を引張り出してみた。自分の通ってきた道を、震える指先で辿ってみる。指が、ある一点で止まる。

「オペラ座……！」

その続きは、声にならなかった。今ミロのいる場所の真上……それこそ、オペラの殿堂そのものだったのだ。

「何て……ことだ……」

ミロは、うわごと 譫言のようにそう吐き出して唾をのみ込んだ。

ガストン・ルルーの小説『オペラ座の怪人』には、

オペラ座の地下に住む怪人のことが書かれている。彼は切穴の名人であり、魔術を使うように人を殺すという。勿論、それは物語の世界のことなのだが、その骨格はオペラ座の幽霊伝説から生まれたという話

だった。

——まずいな……——

自慢ではないが、幽霊の類は得意ではない。実体があるなら叩きのめすことも出来るが、相手が空気をたいて頼りないのでは手の打ちようがない。怪人だか幽霊だか知らないが、見付からないうちに退散しようと考えて、ミロは凍りついたようにその場に立ち止まった。

あの時……紳士は何と言った？

「……クリステイ……」

クリステイとは、クリステイ・ヌの男性形ではないのか。そしてカミュは——そう呼ばれてその手を取ったのだ！

「まさか……まさか……！」

ミロは鏡台へ駆け寄った。鏡の中に白い顔が浮かび上がる。

それはまさしく、地獄の怨火に焼かれた死人の顔だった。

「クリステイ、悩みがあるなら僕に話してくれないか」

ラウル・ド・シャニユイ子爵は昨晩、二日間行方不明になっていた恋人をやつとのことと捜し出した。ところがその恋人ときたら、何かを考え込んだまま、ろくに返事もしないのだった。

「クリステイ……君がいない間、どれだけ皆が心配したか！」

「すみません、子爵……ですが私にも、何処に居たのか分からないのです」

「どこにいたのかわからない？」

「ええ。しかも、何かとても大切なことを全て忘れてしまったよう……」

二日ぶりに入った暖炉の熱が、ふわりと部屋を包む。揺れる蠟燭の光が、俯く白い顔を照らし出していた。

「……そうなのか？ でも僕には今まで通りの君に見えるよ、クリステイ」

「その名前もなんです！」

子爵はびつくりした様に恋人を見つめた。一体彼は、何を言うつもりなのだろう。

「それは確かに私の名前なのに……私にはもう一つ名前がある筈なんです」

「どんな？」

「確か、『カミュ』という……」

「……そんな話は聞いたことがないな。君からも、君の父上からも。どうしてそう思うんだい？」

「それが……」

クリステイと呼ばれた青年は、悲しそうに下を向いた。

「分からない……。覚えていないんです」

子爵が小さく溜め息をつく。

「……疲れているんだよ、クリステイ。少し舞台は休んだ方がいい。勿論レッスンも——」

「いいえ！」

自称『カミュ』は、迷いを振り切るように立ち上がった。

「音楽の天使が降りて来てくれるのです。休む訳にはいきません」

「いい加減にしなさい！ その音楽の天使は、実はオペラ座の怪人だというじゃないか！ 君は騙されているんだ！」

「でも、彼は私に音楽をくれた！」

「クリステイ……まさか怪人を愛しているのか?!」
子爵が、溢れる感情を抑え切れずにカミュに詰め寄る。
カミュは、赤くきらめく双眸でラウルを見つめた。

「いいえ！ 私が彼に対して抱いているのは、感謝と……恐怖だけです」

言葉を伴わない視線だけの応酬が、つかの間の時を支配する。

「……それじゃ僕は……？」

やがて、急に力の抜けたように崩れ落ちて、子爵はカミュの膝に顔を埋めた。

「結局は僕も、片思いなのか……？」

やるせない呟きが、カミュの胸に突き刺さる。カミュは沈痛な面持でじつとその姿を見下ろしていた。

「……ラウル……」

act.3 舞台裏で

夜が明けた。ミロはオペラ座の地下で——正確には
ルイ・フィリップ調の部屋にある鏡台の前で、一夜を
過ごした。

何のことはない。気絶していたのだ。

「畜生！」

ミロは側にあつた銀の燭台で鏡を叩き割つた。自分
で見るのもおぞましいその鏡像は、銀色の硝子と共に
粉々に碎けて散つた。

「さて・・・どうするかだな」

怪人らしく蠟造りの仮面をつけて、深々と考え込む。

一晚過ぎて、ミロにも少しづつ事の次第が飲み込め
てきた。

自分は怪人になり、カミュはクリスティヌ・ダー

エになつた。つまり自分達は、『オペラ座の怪人』の
主役二人になり代わつてしまつたのだ。

「いかれてやがる・・・！」

タイムトリップならともかく、物語の世界に入り込ん
でしまふなんて！

聖闘士としての力は、何一つ使えなくなつていた。
勿論、テレパシーも通じなかつた。そしてその代わり
に、オペラ座の怪人ことエリックの記憶が、ミロの頭
を占領していた。

「つまり俺たちは同調シクしたつて訳か・・・」

同調シク。本質的に似たものが、共鳴を繰り返し同一化し
てしまふことである。

随分とややこしい事態であつた。それはこのたつた
一つの身体を、ミロとエリックの両方が支配している
ということに他ならないのだから。

ミロは仮面を僅かにずらし、もう一度顔に触つてみ
た。醜く歪んだその皮膚が自分のものではないことが、
今度ははっきりと感じられた。例えて言えば自分の皮
膚の上に他人の皮膚が張り付いているような——

外せない仮面が取りついているような感じなのだ。

「冗談じゃないぜ。何とかしてこの同調を解いて元の世界に戻らないと……」

カミュはどうしているだろう。ミロは、エリックの命ずるままに樞の木の扉を開けると、迷路のように入り組んだ道を一度も迷うことなく舞台裏の楽屋へと進んでいった。

カミュはじつと俯いたまま、長い間その瞬間を待っていた。

つい先日まで無名の声楽家だったクリステイは、二度三か月前に音楽の天使に出会ったのだった。この世界の誰もがなし得ない美しい声で、豊かな情感を持って歌う一人の天使に。

「違う……あれは——」

けれど今、彼は知ってしまった。天使が実は一人の人間であり、しかもその顔は見るも恐ろしい程に赤黒く爛れた、恐るべき殺人鬼であることを。

「エリック……不憫な……」

もしも怪人の顔が人並みであったなら、彼は本当に音楽の天使たり得たのではないのか？

クリステイはエリックの姿とその殺人技術を忌み嫌い、一方で彼の音楽の才を崇拜していた。事実、神はエリックに人並みの容姿と引換えに、誰にも到達することのかなわぬ天賦の才を授けたのだった。

では、『カミュ』は？

「ラウル：ラウル……私には分からないのです……」
奇妙なことに、カミュの方はカミュ自身の記憶を失ってしまった。あの夜、ラウル・ド・シャニユイ子爵の手を取ったあの瞬間から。

——カミュ……君は……——

楽屋に掛かっている大きな鏡の裏から、ミロはその様を見つめていた。表から見れば普通の鏡に過ぎないそれは、裏から見ると向側が透けて見える硝子としての性質も合わせ持っていた。二十世紀に生きるミロはマジック・ミラーという言葉を知っているが、この時代——十九世紀ということを考えると、これはエリックの『発明』なのに違いなかった。

——君も子爵に惹かれているのか……？——

クリステイーヌ・ダーエのように。

きりつと、胸の奥が痛んだ。その痛みに耐えるように、ミロは唇を噛み締めた。オペラ座の怪人は、一人の名もない歌姫に恋をする。そして自分の才能のすべてを捧げて、歌姫を名ソリストに育て上げる。しかしその時すでに、歌姫には幼馴染みの思い人がいるのだ。そして――

——あれ？ それからどうしたんだっけ……？——

ふと、ミロはその先の記憶が途切れていることに気付いた。きつと、自分が登場人物の一人になっているから、判らないのだろう。

——くそつ、なるようになれ……！——
たとえ結末の決まった物語であろうと、登場人物が動かなければ話の進行しよう筈もない。ミロは、半ば自暴自棄になってエリックに自分の体を委ねた。

『……そんな悲しそうな顔をしないで、クリステイ……』
「……エリック？」

『今度のオペラは君が主役になる。道ならぬ恋に苦しむ修道士……君以外にはこなせない……』

「エリック！ もういい！ 私は自分が解らない……オペラなんて！」

『だめだ！ 君には才能がある……完璧なリリコ・アクト—— 本当はオペラなんてどうでも良いのだ、クリステイ。君の声はもつと崇高な音楽を歌う為にあるのだからね……だがその前にまだまだ磨き抜かれなければならない！』

驚いたことに、ミロの喉はこの世のものとも思えない妙なる調べを紡ぎ出したのだ。自分で自分の耳を疑う程の。

——これが『怪人』の歌……？——
カミュが対旋律を合わせてくる。典札聖歌の良く似合う、澄んだ歌声。

運命がおまえを永久にわたしに縛る……
二つの旋律が互いに追いかかけ合い、絡み合う。時の経つのも忘れて、いつしか二人は同じ感動を共有していた。

——カミュ！——
エリックがクリステイの名を叫ぶのと同時に、ミロも

また胸の内で叫ぶ。その瞬間、ミロは自分たちが決して二人ではないことを悟った。

ミロとエリックは、似ているからこそ同調したのだ。

運命がおまえを永久にわたしに縛る……！

ミロは鏡の切穴を開け放った。

「さあ、来るんだクリステイ……もう一度、私の王

国へ！」

目を閉じて すべての悩み夢の中に 捨てよ
心は空に高く果てしなく舞い上がる

たえなる夜の闇が やさしく君を包む

心開いて夢を咲かせる 君は私のもの

夜の調べの中で

act.4 怪人の王国

「明日の晩までに、地上に帰して下さい」

ミロを見つめて、カミュはきつぱりと言った。

「恩師だろうと誰だろうと、私の自由を縛る権利なんてない」

突き放したような口調に流石にカチンときて、ミロが返す。

「……そんなことは百も承知さ。だが覚えているか？

今まで君と俺の間で権利なんて言葉をお口にしたらことは一度もなかった……カミュ！」

「な……」

一瞬にして、カミュの顔が蒼白になった。予想外の反

静かに広がる闇 心も 胸もときめく

やさしい夜 やすらぎの夜

きらめく夜のひかり その手にとらえてごらん

耳をすませて 聞いてみたまえ やさしい音楽を

夜の調べの中で

応に、ミロは少し狼狽した。

「何故……どうしてその名前を……」

「カミュ……?」

「貴方なんですか? 私に不可解な記憶を植えつけ、更に奪っていったのは……」

「俺が……奪った……?」

おかしい。カミュがこんな反応をする訳がない。ミロはカミュの瞳を凝視した。

カミュ……まさか……

「私に『カミュ』という人物の記憶を吹き込んだのでしよう! それから今度はそれを消してしまった!」

「カミュ……」

全身が、ゆつくりと冥界の冷気に侵されていくような気がした。ひとりでに、握り締めた拳が震える。

「……忘れたのか?」

「エリック?」

「……全部忘れたのか? 君が誰で、俺が誰で、俺達
がこれまでどんな風に生きてきたのか——」

「何を言っているんです?! 私にはまるで解らない!」

ミロは顔を上げた。仮面に隠された醜さも忘れて。

「君が散々からかった、この派手な金髪も……」
胸が張り裂けるかのようだった。自分の置かれた状況までは、頭が回らなかった。自分はカミュの事を覚えているのに、カミュはミロの事を忘れていた。その事実が、こんなにも自分を苦しめるとは。

——許せない!——

思えば、この時既にミロはエリックと同化していたのかも知れない。

はつきりそれと判る程に唇を歪めて、ミロは言い放った。

「:そうさ、これはゲームだ。鍵は君だよ、カミュ……
喜劇になるか、悲劇になるか——だが覚えておけよ、
君がそうやって逡巡しているうちにも、劇は進行する
からな!」

「エリック……!」

「もつとも……」

そこでミロは急に優しい声になって言った。

「俺はそれでも構わないがね、クリステイ。その時は
力づくで君を手に入れる。……愉快な話じゃないか!
世界で一番醜い化け物が、美貌のソリストと共にオペ

ラ座の地下で暮らすなんてね！」

「そんなことをしてどうなるというんです?! 私は——」

「どうなるかだつて?!」

ミロは叫んだ。その声は、悲鳴に近かった。

「君は知らないと言っても言うのか……? 楽屋でもあの子爵の名前を呟いていたくせに……人を愛する者にとつて、その人が側にいることが何の意味もないことだとしても? ……思い出してみろ、クリステイ……俺が今まで君の存在以外に望んだものがあつたか?

富も名声も何も要らない……ただ、君がそばにいてさえくれたら！」

全身を、熱い血が駆けめぐる。『クリステイ』に向けられたそれは『エリック』の叫びだったのか、それとも——。

「クリステイ……君を愛しているんだ……」

涙こそ流れなかったが、エリックは泣いていた。そしてその内側で、ミロもまた。

「エリック……」

カミュは返す言葉もないままミロを見つめた。不用意な一言が、余計に怪人を傷つけることになるだけに、

何も言えなかった。

カミュ自身、自分の心が分からないでいるのだから。

「……約束だ。君に歌を教えて、明日までに帰そう。

君はまだ俺を選んでいないし、あの子爵を選んでもない。君が心を決めた時——その時こそ、最後の幕が上がるんだ！」

acts

黄金の豎琴を持つアポロン

一週間が過ぎた。

ミロは、細く開いた天窓から沈む太陽の光を見た。一日に一度くらいこうして陽光を見なければ、完全に自我を失ってしまうような気がしたのだ。

「……何とかなると思つていたよ、カミュ。」

眩しが、オレンジ色の光の中に融ける。紅から赤紫に変わりつつある西の空は、あの日夕方の公園で見た

カミュの瞳を思わせた。あの時は確かに、カミュはミロを見ていたというのに。

——だってそうだろう？ 今迄何だって乗り越えてきたんだからさ……

本当に、何とかなると思っていた。たとえふた目と見られぬ姿になろうと、得体の知れない世界に紛れ込もうと、かならず解決出来る、と。どんな事態に陥っても、カミュと二人なら——。

だが、この世界にカミュはいなかった。

「……酷い奴だよな……君じゃないのに、何で君の姿をしてるんだ……？」

ミロは落ちかかる長い巻き毛を指先で梳く。カミュが好きだと言った、黄金の髪。その一言で、ミロは髪を伸ばすことにしたのだった。長い薬指が震えて蠟の仮面に触れる。

——そのうちに俺も——

エリックと同化して、この世界から消えてしまうのかも知れない。誰にも知られることなく。

この一週間、日に日に薄れていく自我に焦りを感じながらも、彼は何とか自分を保ち続けてきた。だが、

それにも確かに限界があるようだった。自分の存在を無視され続ける度——カミュの姿をした『クリステイ』に『エリック』と呼ばかけられる度、ミロは自分が誰なのか判らなくなる。

「馬鹿野郎……」

疲れ切った吐息が、ミロの口をつく。エリックとミロとの類似こそが、彼の自我を奪いつつあることを、ミロは知っていた。エリックの『クリステイ』に対する狂的な執着は、ミロの中でそっくりそのままカミュへの感情へとすり変わるのだ。自分の内にこんな激しい感情が在ったことを、ミロは今までずっと知らないでいた。

「何をしでかすか……もう自分でも分からないな」
エリックと共に。クリステイがラウルを選んだ時——
—カミュがミロのことを思い出さなかった時、自分達
は一体どんな報復手段に出るのだろう。

「カミュ……君が全てを握っているんだよ……」
弱々しくそう付け加えて、ミロはゆっくりと目を閉じた。その向こうで、静かに夕日が沈もうとしていた。

君を抱きしめ 君を守ろう
さあ今光が 君を解き放つ

私の望みは ただ自由に

いつどんな時でも二人は共に

助け出そう全てを尽くして 君をその孤独から

言つて欲しい 僕が要ると

共にどこまでも二人で

クリステイヌ 君が全て

言つて二人の愛の誓いは 決して変わらないと

どんな時でも二人の愛の誓いは

言つて欲しいの

君が全て

今 君を愛す

共にどこまでも二人で

今 君を愛す

「クリステイ、三週間後に北極探険の出発が決まった」

夜も十時を過ぎると、オペラ座は人気も消えて静まり返った墓場のようになる。地下にひそむ無言の敵意に追われるようにして、カミュとラウルはオペラ座の屋上に出た。丸いドーム型の天井の頂に、黄金の豎琴を持つアポロン像が立っている。そのふもとまで来て腰を下ろした時、ラウル・ド・シヤニユイ子爵は思いつめた瞳でそう打ち明けたのだった。

「では貴方も——」

「ああ、出発しなければならぬ。軍の命令だからね……もう二度と戻つて来られないかも知れない」

「ラウル！ 何を弱気に——！」

カミュは思わず声を上げた。クリステイがそうさせたのだ。

「貴方らしくもない……」

「自分でもそう思うよ、クリステイ。だが僕は今迷っている。果たして僕は、生きて帰つてくるべきなのか……？ もし君が、僕を必要としてくれないのなら——」

「止めて下さい、ラウル！ 何故そんな事を？」

カミュは長い指を子爵の頬に延ばした。その肌は青ざ

めて、びっくりする程冷たかった。

「……貴方を要らないと思つたことなど一度もない……幼い日に海辺で出会つた、あの時から。いつか会えるかも知れないと半ば希望し、半ば絶望していたのです……貴方が私を覚えてくれているという保証はなかつたし、何よりも身分が違い過ぎるから——」

「クリステイ……」

「だからこそ私は彼に誓つたのです。自分は一生を音楽に捧げると——私の中に地上の愛は存在しないと。あの時はそれが音楽の天使だと思つていた……。だからたとえその誓いが音楽の天使に身を委ねることであつても、構わないと思つたのです……」

子爵の表情が、さつと変わった。頬に延ばしたカミュの首を荒々しく掴み締める。

「だが先に君を欺いたのはエリックの方だ！ よりによつて君の心の一番神聖な部分につけ込み、君が父君との大切な約束として信じていた『音楽の天使』の名を語つて君の心に入り込むとは……そんな誓いなんて無効だよ、クリステイ！ 僕には許せない！」

子爵の両拳は、怒りの為に震えていた。カミュはま

るで子供の怒りを宥めるかのように、その上にそつと掌を重ねた。

「分かつています……。夢はついえてしまった。いつまでも失つた希望に縋り付くのは悲しいことだと……。だから今夜こそ、私は答えを出しましょう。」

夜風がカミュの細い髪をふわりと揺らす。糸のような輝きに縁どられてまっすぐに子爵を見つめると、カミュははつきりとした口調で告げた。

「帰つてきて下さい、ラウル……。誰よりも貴方を愛する私の為に。」

「クリステイ……。本当に？」

子爵の表情が光が差したように晴れていく。カミュはその桜色の頬に指を滑らせて、静かに微笑んだ。

「永遠の誓いにかけて、貴方を。」

愛を与えた 音楽を与えた

そのお返しが これだというのか

愛するものに 今裏切られて……

つて陽光を受けてきらめいていた筈の黄金の髪が、細い銀の月に照らされて生き物のように揺れる。

「……秒読み開始だ。ぐずぐずしているとオペラ座ごと全てが吹き飛ぶぞ！」

太陽神をあざ笑うかのようなその声は、クリステイとカミュの双方に向けられていた。

ミロは見た。凍て付いた風の吹き荒ぶ、張り出したひさしの上から。黄金の竖琴を持つアポロンの神像の下で、若い恋人達の唇がどちらからともなく近付き、優しく触れ合うのを。

「……宣戦布告だな……」

誰もいなくなつた屋上で、眩きが広がる。ひどく乾いた声。

救いの道は、絶たれた。これ以上もがきながら救いの手を待ち望むことに、何の意味があるだろうか？

全て沈黙が支配する中、闇色に染め抜かれた外套が風に叩かれて不釣り合いな程忙しげな音を立てる。か

act.6 再び、地底の王国

もはや退けない 振り向くな

戯れはこれまでだ

思い知るのだ 夢に身を任せ 悩みを捨てろ

燃えるこの思いが 熱いこの願いが

二人を一つにする

もはや退けない 行く手には 未知の愛の喜び

もはや戻れない

もはや退けない 二人きりの 物語が始まる

迷いに迷って いつの日か貴方と

ひとつになる

恋の血が通い 恋の炎燃え

私を焼きつくす

もはや退けない 行く手には ただ一筋の道が
もはや戻れない

ソリストが誘拐された。

それは大勢の目前で——観客の視線をまっすぐに浴びる舞台上で遂行された。『汚れなき天使達よ、輝かき天使達よ、我が魂を空のただなかに運び給え』という叫びが発せられた直後に、一瞬——ほんの一瞬だけ、場内が暗転したのだ。ところがその次の瞬間、再び光が舞台を照らした時には、カミュの姿はもうなかった。

「クリステイ！」

ラウルの絶叫が天井に突き刺さる。ラウルには分かっていた。これは、怪人の仕業だ！

「クリステイ・クリステイ・返事をしてくれ！」

周囲は突然の出来事に騒然としていて、助けを求める声など聞こえよう筈もない。

「クリステイ！」

些か意地の悪い知識人たちは、子爵の乱心ぶりを面白そうに眺めていた。成程、由緒あるシャニユイ家の子爵が一介の音楽家に心奪われたとあつては、ゴシップ記者ならずとも興が涌くに違いない。

しかし今のラウルには、そんな好奇の視線にかかずらつている余裕などなかった。

「そうか・・・クリステイは確か地下に出入り口があると言つていたんだ！」

はつと思ひ当たり、地下への階段を駆け下る。

相手は、氣違ひじみた殺人鬼だ。ただ一人自分が愛し、名ソリストに育てあげたクリステイに裏切られたと知つたのなら、一分一秒とて無駄には出来ない。永遠に逃げる事が出来ないようにすることだつてあり得るからだ。

ラウルは、今生死すらも定かではないカミュに向かつて叫んだ。

「すぐに行くから・・・待っていてくれ！」

どんな時でも 二人の誓いは

決して変わらないと

言つて欲しい 僕を求め

共にどこまでも 二人で

クリステイヌ 君がすべて

カミュは、クロロホルムで朦朧とした意識を醒ますうと何度も頭を振りながら、部屋の中を見渡した。霞んでいた視界が徐々に輪郭を取り戻し、やがてはつきりと姿を現す。ルイ・フィリップ調に整えられた、閑静な部屋。

「気がついたか？ もう物語は最終幕に入っているよ。今日こそ人類にとつて最も崇高な夜になるんだからな！」

「・・・エリック！ 何故——！」

カミュは身を横たえられたソファからやつとの思いで身を起こして、ミロを睨んだ。仮面のために表情は判らなかつたが、怪人が何か大きな決意をしているのは容易に見て取れた。

「言つただらう？ 君の声はもつと崇高な曲を歌うた

めにあるんだと。」

ミロが、不気味な程落ち着き払った声で続ける。

「今日こそその日さ。君はここでミサ曲を歌うんだよ。

俺達の結婚ミサ曲をね・・・それからあのマドレーヌ寺院に行つて、司祭の前で二人の仲を認めてもらうのさ！」

カミュはきつく手を握り締めた。これは冗談ではない。彼は本気で、自分をこのオペラ座の地下の墓場に幽閉するつもりなのだ。

「・・・私が断われれば、どうなる？」

「そうだな・・・その時は、これが死者の為のミサ曲になるだけだ・・・だが俺がここまで来て、何の準備もなく君を連れて来たと思うのか？ カミュ！」

ばさつと、ミロは楽譜をテーブルの上にぶちまけた。それは、エリックがこの日の為に作曲したものだつた。

「そのミサ曲は一人や二人の為のミサ曲じゃない・・・その時には、今上のホールで君の演技の代わりにつまらないマイアベアのオペラを見ている連中が、一気に吹き飛ぶのさ！ この更に地下にある山のような火葉で・・・君や俺や、今、君を捜して狂つたよう

に駆け回っているラウル・ド・シャニユイ子爵をふつとばした後でね！」

「エリック・・・！」

流石に、カミュは絶句した。自分とラウルの命が狙われるであろうことは覚悟していた。だが、まさか彼自身もオペラ座ごと自爆する気でいたとは・・・。

「君次第だよ、クリステイ。君がウイと言え、ミサは結婚ミサになり、みんなは救われる。君は今夜、上にいる何千何百の人々に、命の贈り物をするんだ・・・考えてもみるよ、結婚ミサと葬送ミサと、どつちが楽しいか！ けどノンと言え、全ては一瞬で終わる。

この下らない喜劇も華々しく幕を閉じる・・・俺はどつちでも構わないがね・・・どつちに転んでも、未来永劫君と共にいられることに変わりはないんだから！」

それは、心からの叫びだつた。ただ一人、ミロが欲したカミュという存在への。エリックの嘆きに共鳴しつつ、ミロは自分の中にそういつた感情が存在していたことを、半ば驚きを持って見つめていた。

「エリック・・・！」

カミュが押し殺したような声で呟く。

その時、不意に壁の向こうで高く呼ばれる声が出た。

「クリステイ！ クリステイ！ どこにいる！」

「ラウル・・・?!」

びくつと、ミロは体を震わせた。あらん限りの敵意を込めた視線が、樫の木のドアにぶつけられる。もうじき、子爵がやって来るのだ。ミロの脳裏に、数日前の屋上の風景が蘇った。子爵がこの部屋までやって来れば——その時は、あの夜のように寄り添う二人を見ることになるだろう。

「・・・そうはさせるか！」

厚い木の扉が、乱暴に叩かれる。ミロは、カミュの手首を無理矢理引き寄せた。

「そこに居るんだらう、エリック！ クリステイを返せ！ 中に入れろ！」

「君に返せと言われる筋合いはないな・・・子爵。カミュは誰のものにもならない・・・さあ、入れ！」

驚いたことに、樫の扉は自動ドアの様に勝手に開いたのだ。彼が切穴の名人と言われる所以だった。青ざめたまま肩で息をしている子爵が、一步前へと踏み出す。ミロに捕われたカミュを見——声を上げて駆け寄

ろうとしたその瞬間、ハンジャブの輪差が子爵の喉を襲った。

「ラウル！」

細い紐が恐るべき正確さで子爵の喉に巻きつく。一瞬遅れて、輪差はまるでピアノ線のようにびんと張りつめた。

「何を・・・する・・・！」

「さて、支度は出来たよ、カミュ。正直言つて、君がこれほど勿体ぶった性格だとは知らなかったな・・・この俺に、最後まで怪人の役を演じさせてくれるとはね！」

「止める、エリック！ ラウルを放せ！」

「だったら選べ！ 結婚ミサか葬送ミサか！ あいつを許すもんか・・・君が命で償うのでなければ！ 君が最終幕まで持ち越したんだ・・・どうする?! もはや退けないぞ！」

「クリ・・・ステイ・・・だめ・・・だ・・・どのみち・・・殺される！」

喉に喰い込む輪を外そうと必死でもがきながら、ラウルが喘ぐ。カミュは紅の瞳に厳しい光を湛えて、言っ

た。

「エリック：…今ここで誓え！ 私が条件をのんだら、決してラウルに手出しはしないと！」

「じゃあ俺も誓って貰おう。君が俺のものになったら、決して自ら死を求めたりしないとね！」

カミュがきりつと唇を咬む。

「判つてるさ…カミュ！ 君は子爵と会場内の人間を助けたら、自殺するつもりだったんだろう？ ……そんなに嫌か、この怪人と暮らすのが！」

「クリステイ…だめ…だ…！ 君が犠牲になるくらいなら…今ここで死ぬ！」

「何故そこまで執着する?! 貴方ほどの芸術家が、たった一人のしがない声楽家に——！」

「エリックになれば解るさ！」

ミロは叫んだ。まるで叩きつけるように。

「…君だからだよ、カミュ。他の誰かなら、誰がここまでするもんか。エリックは、クリステイ…だからこそ愛した。この顔の為に人類から嫌い抜かれたエリックが…最も祝福を受けた人類である君を求めた！ 世界中で君だけを…」

「それは僕も同じだ！」

苦しい息の下で、子爵が叫ぶ。

「君の…音楽の才は認める…だが…クリステイに殺人鬼は…似合わない…！」

「終わりだ！」

ミロは言葉の応酬を打ち切った。これ以上、話すこともない筈だった。

「栄光はヒロインに帰するべきだ。そうだろう？ 人々を救うかオペラ座もろとも吹き飛ばさ…選択権は君にある。素晴らしいじゃないか…今この時、全世界でただ一人、この命を救えるのは君だけなんだ！」

泣いている。カミュはそう思った。今彼の目の前で、その蠟作りの仮面の下で、怪人は叫びながら泣いている。たとえ声は乾いていても。

彼は、こうまでしても『クリステイ』が自分を選ぶことはないと思っているのか？ それとも決して愛されることはない絶望しているのか…？

「エリック…」

小さな小さな声が、カミュの唇から漏れる。

「・・・だめだ、許さない・・・選べ。」

カミュは瞳を閉じた。今度こそ本当に、全てに答えを出す時が来たのだ。

「ラウル・・・聞いて下さい。貴方のことは、私が永遠に愛している。たとえ貴方と共に在る事が出来なくても——」

「クリステイ！」

ラウルが悲痛な声を上げた。

「嫌だ・・・クリステイ！ 君のそばにいられないのなら・・・僕は——！」

「生きて下さい！ 貴方は愛されているのだから！

でもエリックは違う・・・」

カミュはゆっくりと顔を上げ、ラウルを見つめる。

「どうか心を静めて聞いて下さい。たとえ貴方にとって憎むべき敵であろうと、人々にとつて醜悪な怪人であろうと・・・私には音楽の天使を忘れることは出来ないのです・・・」

「・・・クリステイ・・・」

エリックは呟いた。誰にも聞こえない、幽かな声で。

「可哀想な人だ・・・エリック。もし貴方が、私に

見せた優しさのほんの半分でも人々に見せていたなら・・・貴方を思う人も現れた筈なのに・・・」

「嘘だ！」

「嘘じゃない。現に、もしラウルよりも先に貴方に出会えていたなら、私は誰よりも貴方を愛していたのだから。」

「嘘・・・だ・・・」

二度目の声は、呟きに近かった。首を絞めつけられたままの子爵は、もがく力を奪われながらも、カミュの告白に聞き入っている。

「ラウル、聞いて下さい。たとえ貴方には私しか居なくても、貴方を思う人は沢山居るでしょう。けれどエリックには誰も居ない・・・この私しか！・・・ずっと悩んでいました・・・。何故、愛という言葉はひとつしかないのか、と」

カミュはそこで少し口籠った。何と言つて良いのか、考えあぐねているようだった。

「私は貴方を愛しています・・・誰よりも幸せになつて欲しい・・・そして願わくば、私も共に在りたいと。貴方の為なら、私はどんな地獄の責苦も耐え抜いて見

せると誓える。でも私は……その一方でエリックを、彼が望むならこの手で殺してやりたいと願う程に愛しているのです！」

「クリステイ——！ そんな……！」

「自分でも解らない……何故こんなことになつてしまつたのか。余りに違う二つの愛情が、何故一度に沸き起こつてきたのか……クリステイは貴方を愛しているのに、カミユは！」

ミロは弾かれたように頭を上げた。カミユ……今何と言つた？！

「出来るなら、貴方と共に光の道を歩みたかつた。破壊の愛より、育む愛を選びたかつた……」

カミユはミロの仮面に手を掛けた。一気に仮面を引き剥す。反射的に顔を覆おうとしたミロの手を、カミユは自分の手で頬を包み込むことによつて阻んだ。

「不憫なエリック……今こそ、貴方の問いに答えましょう。……地上の愛は永遠にラウルのもの。……けれど今、それ以外の全てを貴方に託す！」

カミユは、躊躇いもなく自分の唇を怪人の唇に押し当てた。狼狽した呟き声上がる。瞳を閉じ、柔らかな髪

に指を潜らせ、耳朶を擦り——その口付けを受ける唇が息苦しさに噎せて、光る唾液が口の端から喉元を伝うまで深く舌を絡めてから、カミユはゆつくりと唇を離した。息の詰まるような沈黙が、陽光に見放された地底の部屋を支配する。グラスに注がれた赤ワインを思わせる紅の瞳が、向かい合う二つの瞳を凝視する。

「……ミ……ロ……？？」

その瞬間、すさまじい光が二人を包んだ。

第三章

エピローグ 再び、一九九二年のパリで

〜怪人の愛の終わり〜

「いてて・・・首が——」

ミロは呻いて身を起こした。長い間、大理石の石段の上で気絶していたらしい。目の前にはオペラ座がそびえており、月は中天まで上がっていた。辺りを見回し、カミュの姿に気づいて駆け寄る。

「おい！ カミュ！ 大丈夫か?！」

呼びかけられて、カミュはゆっくりと目を開けた。心配そうなミロの顔が、カミュの顔を覗き込んでいた。

「ああ・・・もう大丈夫だ。一体今のは——」

言いかけてはつとしたように口を嚙む。通りから、自動車の音が聞こえる。

「・・・どうやら戻って来たらしいな・・・」

「・・・ああ。」

ミロは街灯を見上げた。それは、電球になっていた。

「全く・・・」

ミロの拳が、震える。

「ひどい奴だよな！ カミュ！ 俺のことすっかり忘れちまってさ——！」

同調は、シメ解けた。顔が元通りになっていることなど、触れなくても判っていた。

「すまない。でも私にも理由が解らないんだ・・・最後の瞬間まで、一体誰が記憶を封じ込めていたのか——」
「そこまで言って、カミュは急にきまり悪げに口を押えた。ふいと顔を背ける。記憶を取り戻した経過を、思いつ出したのだ。

「何赤くなってるんだよ」

「うるさい！」

「すごかったよな——ほんと。あんな激しいキス、一体誰に教わったんだ？ 子爵か?」

「馬鹿！ 彼とは何もなかった！」

道行く人々が、ちらりと二人の様子を窺って行く。

二人は思わず声を潜めた。

「本当に？」

「当然だ！ 大体、何故君がエリックで、私がクリス・ティーンなんだ？！ 男と女が同調するなんて——」

言いかけて、はつと何かに気付いた表情になる。それからちよつと恨めしげに、カミュはミロを横目で睨み付けた。

「・・・そうか。君の仕業、だな？」

「おい、ちよつと待てよ、俺何も知らないぜ？」

「・・・君の潜在能力だ。君は君の記憶を保ったまま、怪人と同調した。私は私の記憶を封じなければ、クリスティーンと同調することが出来なかった。つまり私が歌姫になったのは君がそう望んだからで——別にクリスティーンと私が似ているからではなかったんだ。・・・要するに私は、君の潜在能力が引き起こした現象に巻き込まれたんだ」

「そんな——」

ミロは反論しようとして口を開いた。だが、言葉は

出てこなかった。言われてみれば・・・思い当たる節がなくもない。ミロ自身、結構エリックになりきっていたのだから。

「全く・・・お陰でミュージカルを見損ねてしまった。見ろ、もうみんな観終わって出て来ているぞ」

どうやらかの世界での一週間は、現世界では数時間にしかならなかったらしい。ミロも慌ててオペラ座の入口を見た。成程、観客が屋内から溢れ出てきている。

「・・・まあいいじゃないか。ミュージカルなんかよりもつと臨場感ある体験が出来たんだから。」

「よく言う・・・すごい剣幕で散々喚いていたくせに。」
「しようがないだろ！ あの時は本気でもう助からないと思つてたんだから！ ただでさえとんでもない顔になって心細いのに、君はどこぞの貴族に夢中になつてるし、俺のこと知らないって言い張るし・・・!!」

その言い方が余りにも拗ねた子供じみていたので、カミュはつい吹き出してしまった。ミロがふつとふくれつ面になる。

「笑うことないだろう！ 人が命懸けで悩んだつての

に！俺、マジであの世界で死ぬかも知れなかったんだぜ？！

勢いでそう言ってしまったから、ミロは慌てて口を抑えた。そうだ。もう劇は終わっているのだ。

カミュは、笑わなかった。

「私だつてそうだ、ミロ。君がもし犯罪を犯すなら、君の舌を噛み切つて私も死ぬつもりだつた——」

「カミュ……？」

カミュが、頬にかかるミロの髪を右手で撫でつける。

「……君を一人で死なせる気はなかったよ……ミロ。」

ミロは青碧の瞳を閉じた。そのままカミュを見つめていたら、涙が溢れてきそうな気がしたからだった。

「……ラストまで、全部思い出したよ。あれから怪人はラウルを助けて、二人を行かせてやるんだよな。」

一生にただ一度、愛する人の口付けを受けて……

「随分と愁傷だな……」

「ついさつきまで俺だつたんだからな。気持ちにはよく解るよ。……結局、愛する人を不幸にしてまで自分の許に縛りつけておける程、強い心の持ち主じゃなかったのさ、エリックは——」

ミロはくすりと笑つてカミュを見た。

「君こそどうなんだ？ あの最後の告白は、本当にクリステイーヌの本心だったのか？ それとも——」

カミュもじつとミロを見つめる。それから、僅かに口元をほころばせて言った。

「……本心だよ。クリステイーヌの本心であり、私の本心だ。」

ミロは、ほんの少し赤面したようだった。それからそれを隠すように天を仰いで、小さく一人ごちた。

「そっか……じゃあエリックは救われたな。本当に、もう何もいらな思つてるよ。きつと。」

「あれからどうなったか、判るのか？」

「ああ。多分——」

ミロは、その先を言わなかった。それは、つい先刻まで『クリステイ』だったカミュへの心遣いだった。

「……何にしろ、君は生きてこの世界に戻ってきた。」

そして、めでたくまた年を重ねることになった訳だ。」

「え？」

ミロがびっくりしてカミュを振り返る。カミュが愉しそうに笑っている。

「十一月八日。君の誕生日だろう？ ミロ。」

「あ……」

すっかり失念していた。大きな目を二つ三つしばたいて、ミロは黄金の髪を引っかき回す。

「プレゼントの代わりにと思つてチケットを取つたんだが……見損ねてしまったからな。何がいい？」

ようやくカミュの意図するところを悟つて、ミロはくすくすと笑い出した。青い瞳が生き生きと輝いて、いたずらっぽく光を宿す。

「そうだな……」

前方には、眩い金色の光。そびえ立つオペラ座と、その天頂で何もかも見ていたと言いたげな、黄金の竖琴を持つアポロン像。

ミロは勢いよく立ち上がると、ミロを見上げて微笑むカミュに手を差し延べ、言った。

「……二人だけのミサをやろう。あの、マドレーヌ寺院の石段で！」

我が愛は終わりぬ
夜の調べとともに
・
・
・
・

後書き（一九九二年版・抜粋）

はい、やって来ました言い訳の時間です。予定本

が潰れ急遽コピー誌発行となったわけですが；如何でしたか？ クリスティーン・カミュは置いといてもエリックとシンクロしたミロ様。わりとはまってるでしょ？ 本当は怪人Ⅱサガ、ラウルⅡミロ、クリスティーンⅡカミュの方が書き易かったんですが、栗栖野娘のたつての願いで怪人Ⅱミロになりました。私も最初はどつちが怪人やつてもいいやーなんて思ってたんですけどね。書くにあたってガストン・ルルーの小説を読み返し、市村さん演ずるファントムをオートリパスで聞き流し・・・気が付いたら『ずえつたいミロⅡファントム！』派になってました（笑）。性格が、ミロそっくり。（顔がひどいのはちよつとパスだけだ）建築の天才、芸術の天才、腹話術や手品の王で絞殺術のプリンス。彼はその類稀な想像力で観客を驚かせ、後で種明かしして喜ぶと言う非常に子供っぽい人物なのです。ただその遊びが、人殺しだったりするもんだ

から追われちゃうんだよね。本人は自覚してないの。だって自分を嫌い抜いた人類に対して、彼は何の義務も感じてない訳ですから。先に人権無視したのはそつちだろう、つて。

ところが、ある歌姫に出会った瞬間、変わり始めるんです。クリスティーンに出会った時、彼は初めて人類に愛されたいと思うんです。そして、人並みに家庭を持つて、人間として暮らしたい、と。彼は初めて他人に尽くします。ところが・・・そのクリスティーンさんはラウルが好きなのね。おまけにファントムの姿見て怖がって逃げちゃうし。（この辺は流石にカミュ先生では書けませんでした）絶望と怒りに狂ったファントムは、涙を流して頼んでもクリスティーンが自分を愛してくれないのを知ると、最後の手段に出ます。それがオペラ座破壊計画なのね。ミュージカルではただラウルの命と引き換えに結婚しろと迫るんだけど、原作はもつと凄まじかった。今回のパロディーでは、両方ミックスしてあります。どちらも捨てがたかったのです。でも、『君が愛してくれないのなら、何百人を巻添えにして俺は死ぬ！』というグレートさがいかに

もミロだと思いませんか(笑)? 自分だけ死ぬとか、相手を殺すとかじゃ済まないの。『他人がどうした!俺は不幸せなんだ!』ってね。(中略)

今回一番の正念場。カミュ先生をどうするか。最初に謝るときです。このストーリー、全てミロりんの誕生日本という事で、『ミロ様の話』を念頭に書いてます。だから、それ以外のキャストには多分に無理がある! カミュ先生がよくわからない人になつてるのも、『愛してる』を連発してるのも、全てそのしわざせが来てるからなんです(うつつうつつ・・・自分でこんな先生じゃない! と思つてるから許して(涙)) いや、ただでさえ女役で書きにくいのに、声楽家という設定! 長いことクラシックパロやって来たけど、こんなに苦しい設定は初めてですよ。本当。一体どんな声して歌うんだろうって。作中のリリコ・アクトというのは、声の種類です。声楽家の声はその質と音域からドラマティック・ソプラノとかテノール・リリコとか呼ばれるんですが、リリコというのは「叙情的な」、アクトは「響きの細い」と言う意味です。実際にこんな声があったら(つまり勝手に作ったわけ

だ)おそらくオペラには向かないでしょう。マタイ受難曲でも歌つたら丁度良いのでは。おまけに、またしてもキスをミロ以外の人物にさらわれてしまった・・・(でもディーブ・キスをやらかしたのはミロが最初なのよ)。

話はそれるけど、カミュ先生って本気になつたらキスとか絶対上手いと思うんです。器用だから。上手いっていつても、サガみたいな超絶技巧的巧さとはちよつとちがう。(・・・いつからそういうことになつたんだろう?)あの人の上手さはその辺の『上手い』を超えて極めてるし、夜の帝王だから(ほんまか?)研究して上手くなつただけど、カミュ先生は生まれつき初めてやることでも結構上手になしてしまふ人なんでしょう。(別にやらしい意味だけで言っているわけではない。日常生活一般ね。)ミロ様は情熱派ね。テクニクがなんだ! 大切なのはハートだ! そのくせ好きな人の前に出ると何やっていいのかよくわかんなくなつて、無茶をやつてしまふ。全く反対のイメージもあるかな。とにかく場数ふんで(?)、恋の駆け引きは上手なんだけど、本当の恋愛となるとまご

ついちゃうとか。(あ・・・これじゃ一緒か。)一番体力消耗するタイプだけど、まあ一番元気だからいいでしょう。そうでなかったらカミュ先生の心を掴むことなんてできませんしね(笑)。(後略)

*1 著者をこの世界に案内してくれた

友人・恩人。しかし彼女は先に足を洗ってしまった・・・(涙)

*2 創元推理文庫 三輪秀彦訳

東京創元社 一九八七年 初版発行

*3 一九八九年から公演されていた劇団

四季「オペラ座の怪人」の怪人役

*4 二〇〇二年現在、市村ファントムを

含む「オペラ座の怪人 劇団四季

オリジナルキャスト」(ポニーキャニ

オン D5011-0009)は絶版の様様。

後書き（二〇〇二年版）

九二年の後書きにもあるように、この話はミロの誕生日企画として書かれたものです。当初予定していたオフセットが間に合わず、突発コピーだったのですが、

結局その後オフセットの方は計画頓挫してしまいました。劇団四季の「オペラ座の怪人」を御覧になったことのある方は、作中にちりばめられた歌詞や台詞などに、きつと覚えがあるでしょう。（勿論JASRACの認可は受けていませんので、関係者にはこの本を見せないように（笑）。）もとから土台のストーリーがありましたが、たしか一週間ほどで書き上げたように記憶しています。

今回、再録のために原稿を整理しながら、我ながらおかしかったのは、やはり後書きの部分でした。ミロやカミュはいいとして、何故サガが夜の帝王なんだ？（笑）いや、アニメでは確かに側女をはべらしてたけど。やはり、当時のジャンルの空気のなせる技というか……しかし、十年経った今、自分の軌跡を振り返ってみる

と、彼が本当に夜の帝王だったことは一度もないのですね。まったくそうだったものを書かなかったわけではないけれど、全て発表には至らなかつた。

まじめに話を書こうとすると、そういった設定が邪魔になる。だから、その設定をはずす……ということの繰り返しだったように思います。

一方、ミロとカミュの二人に関しては、当時すでにオリジナル設定ものばかり書いていた私にとって、久々の聖闘士設定ものでした。Chaconne が人様の設定を借りた、いわばパラレル設定ものであったのに対し、PHANTOMは私の設定の範囲内で書かれた外伝的作品に当たります。外伝といっても、本編をほとんど公表していない状態で外伝も何もあったものではないので、それを示す部分を最終的にストーリーから削りました。そんな事情で、謎が一つ話の中で残ってしまったわけです。すなわち、「カミュは一体どこでディープ・キスを覚えたのか？」（笑）。

謎のままのこしておくわけにはいかないので、当時後書きで「カミュ先生は器用なんである」という言いわけをして逃げました。しかし白状すると、その当

時、既に何故カミュがそんなものを知っていたのか、話は出来ていたのです。そして、今私は迷っています・・・十年たつて、いまだに本編が公表されていない状態で、この種明かしをすべきか否か？

このまま逃げるのが一番美しい形だろうとは思いますが、本当にわずかながら、今回収録した二編を知っている人がいること、それからもつと致命的には、本編が本当に公表される保証がないということ（爆）を考え合わせ、十年前の宿題をここで済ませて後書きとさせて頂きます。

Epilogue 2

「それで、その瞬間に同調シンクロが解けて、君たちはやっ」とこの世界に戻ってくる事ができたというわけだな？」

「・・・はい。」

楽しい休暇を終えて、聖域に戻った途端、ミロとカミュは教皇の間に呼び出しを食らう羽目になった。二人は全く知らぬことであつたが、彼等が「オペラ座の怪人」の世界に紛れ込んだ瞬間、彼等の聖衣の共鳴がびたりと止んでしまったのだ。つまり、天蠍宮と宝瓶宮の聖衣はこの世に主なしと見て、彼等の主と自分とを繋ぐ波動の放出をやめ、簡単に言えば眠りについてしまったのである。

当然、この事態に他の黄金聖闘士達は騒然となった。これから聖戦が始まるというのに、黄金聖闘士が二人も欠けたとあつては、戦術のシナリオが大きく狂う。それ以前に、カミュが抑える北磁極、ミロが抑える地中海からバルカン半島にかけての結果は一体誰が補強すればいいのか？

すぐに聖域に残っていた黄金聖闘士が集められ、アイオリアがバルカン半島に、シャカが北磁極に飛んだ。更に、最後に二人が訪れたと思われるフランスのパリへ、アフロディーテが送られた。彼等が、与えられた責務を果たすために四苦八苦すること数時間、ジャ

ミールから駆け付けて天蠍宮と宝瓶宮の聖衣に張り付いていたムウから聖衣の反応が戻ったことが伝えられ、一同訳の分からぬままに聖域に帰還したのである。

「それで、君たちは、聖衣が眠ってしまったってことに全く気付かなかったのかね？」

「はい・・・申し訳ありません。しかし」

こめかみを抑えてため息をつく教皇に、カミュは恐縮しながらも、顔を上げて言った。

「そのような大事態に発展してしまっていたのなら、何故我々をすぐに呼び戻されなかったのですか？」

知っていれば、直ぐにでもこちらへ参上し、事の次第を明らかに致したのですが・・・」

「いや、シヤカなどはそうしろと強固に主張したがね」
シヤカは南国の生まれだ。極寒冷地に飛ばされて、

さぞかし面白くなかったに違いない。

「それをムウが止めたんだ。もう不安材料はないし、折角休暇を楽しんでいる二人を無理に呼び戻すことはない、とね・・・そのかわり、戻って来てから、何もかも洗いざらい吐かせればよい、と」

つまり、十分に休暇を楽しませたあとで、公然と二

人のプライベートをほじくり返せばよい、というわけだ。もともと、天蠍宮と宝瓶宮のつかず離れずの微妙な関係に興味津々の黄金聖闘士達は、その提案に手を打って賛同した。一応公正な立場にあるべき教皇が、この事態に頭を抱えたのも無理からぬことである。

「・・・一応私は君たちのプライベートに配慮して、先に話を聞いておこうと思っただが・・・今の報告からすると、無駄な努力だったかも知れない・・・」

教皇の深いため息を聞いて、ミロとカミュはこれから我が身にふりかかる災難を思い、我知らず身震いしたのであった・・・

「あ、『野獣』が来た、『野獣』が来た！」

「誰が野獣だ、誰が!!」

十二宮というのは全く面倒な作りであって、自分の居城に戻る前に必ず道々の宮の主に挨拶せねばならないことになっている。カミュと別れたあとのミロも、

当然宝瓶宮から天蠍宮の間に居座る宮の主に通過の許可を請ねねばならなかった。人馬宮は無人だからいいとして、問題はその手前の魔羯宮である。

はたして、十番目の宮では、教皇への報告を済ませたミロを絞り上げようと待ち構える黄金聖闘士たちが、ご丁寧にも酒の用意をして待ち構えていた。嫌味のように肴のひとつもないのは、網にかかった奴が酒の肴だという意思表示に違いない。

「だってさ、お前、姫君のキスで元の姿に戻ったんだろー？ まるつきり野獣じゃねーか！」

「なっ・・・！ なんでお前たち知ってるんだ!!」

「あれ、気が付かなかったの？ さっきの謁見、オープンだったんだよ？ 事件に関わりのあるところだけはオープンで知らせるって、そういう約束で、教皇の間で報告って形にしたらんだから。本当なら、十二宮会議に二人をよびつけてぎゅうぎゅう絞り上げるはずだったんだよ？ ねえシユラ？」

既にワインをしこたま空けて桜色の頬をしたアフロディーテが、妙に色気のある流し目で宮の主に賛同を求める。

「全部聞こえましたよ？ 貴方が狂ってオペラ座を顧客ごと爆破しようとしたくんだりとか、カミュがものすごいディーブ・キスをしたとか・・・」

しれっと過激な台詞を吐くのは、ジャミールから呼びつけられた白羊宮の主。

「そうそう!! で、どうだったわけよ?! カミュの味は!!」

最後に遠慮も何もない質問を巨蟹宮の番人から浴びせられて、ミロは思考回路が真っ白になるのを感じた。カミュは、・・・たしかに、怪人にキスしたと報告した。だが「ものすごいディーブ・キス」などとは一言も言っていないのだ。それは、精神障壁がオープンになっていった教皇の間で、ついミロが思い出していた記憶であって——同じく精神波で側耳をたてていた彼等には、そのミロの思考が聞こえてしまったのに違いない。もつとも、そのへんの中継には、テレパシーを得意とする牡羊座の黄金聖闘士が絡んでいるのに違いないのだが。

後で事の成りゆきを知ったカミュに何を言われるか、想像するだに恐ろしいことであった。

「んなこと言われても・・・びつくりして何も覚えてないんだよ！」

「そうなの？ お前意外と情けねーなー。散々女遊びしてるくせに、いざ本命になると駄目なのか？」

「誰が本命だ!!」

「本命じゃない（のか）（ですか）（のかよ）?!」

エコーのように重なった全員の声の迫力に押しされて、思わずミロが半歩後ずさる。

「いつも俺の頭飛び越して散々テレパシー三味のくせして、本命じゃない？ じゃあ本命が現れたら、俺はどうやって寝ればいいんだ?! 必死で聞かないようにしてる俺の苦勞も察してくれよ」

夜中に頭上で飛び交う親密な交信にうんざりしているシユラが、げっそりと肩を落とす。

「馬鹿野郎、聞かれて困るようなことは話してない!・・・だからな・・・あんまりそういうこと言うなって。いい加減怒るぜ？ カミュが。」

「カミュはどうでもいいんだってば。あいつはどうせ、問いつめたって本音は吐かないからな。で、お前はどくなわけよ？ 本命じゃないってんなら、なんでオペ

ラ座ごと自爆なんて考えたわけ？」

「あ・・・あれは、怪人が・・・!」

「で、怪人に操られてたお前は、止める術を持たなかったって？」

「・・・」

思わず黙ってしまったミロに、その場の全員の、やや真面目な眼差しが降り注ぐ。そのとき、今まで黙っていたシヤカが口を開いた。

「困るな。そういうのは。君らはすでに二人で一体だ。あの結界は、そう簡単に他の誰かに引き継げるものじゃないぞ？」

「何かあったのか？」

と、これは同じく黙っていたアルデバランである。シヤカは、隣で持参のチーズをつついていたアイオリアを「続けろ」とばかり肘でこづいた。仕方なく、フォークを置いてアイオリアが続ける。

「実は・・・俺の方で、ミロの張った結界を補強しようとしたら、シヤカの声が聞こえてきて、『それ以上やるな』と・・・。どうもおかしいと思ったんだ。いくら小宇宙を注いでも、どこかへ逃げていつてしま

うようで・・・そしたら、どうやら、北磁極に逃げた小宇宙が飛んでたらしいんだな。暫くしたら、俺の方にも、シャカの小宇宙が伝わって来た。よくよく考えてみたら、カミュの結界は磁力線にそって地球を縦に走ってるし、ミロの結界は赤道と並行に走ってる。丁度お互いに、縦横に絡んでるんだろう。どっちかが膨らみすぎると、どっちかへ逃げるようになってる・・・」

「丁度つり合う場所を探すのが難しくて、結局何もいじる事が出来なかつた。結界を張る為に小宇宙を放出してる最中に、他の小宇宙の攻撃を受けたらひとたまりもないからな。少なくとも私とアイオリアでは、小宇宙が喧嘩してしまう。私のエレメントは土だし、彼は火だからな」

「でもそんなこと言ったら、ミロとカミュは水と風で最悪なんじゃないのか?」

「馬鹿だね。だから愛のなせる技なんじゃないか。」
愛の女神の名を持つ聖闘士が、陶然と歌うように言った。

「だからそれはやめろって・・・かんべんしてくれ・・・俺、マジでカミュに殺される・・・」

既に、誰もミロの悲嘆など聞いてはいない。否定しないミロも悪いのだが、いずれにしても、「オペラ座爆破計画」の一事がある限り、ただの親友だと主張した処で火に油を注ぐだけであろう。

「そうだよな、カミュだってミロにキスして思い出しただし。やっぱ、これって愛だよな」

「でも、ホント、あいつどこでティープ・キスなんて覚えたんだ? あいつ、弟子の教育に悪いとかで、女には絶対手出ささないんだぜ?」

「そういえば・・・妓館に誘っても絶対来ないな。」
「・・・だろ?」

ややあつて、ミロはやつと全員の関心を集めることに成功した。——もつとも、彼が一番望まぬ形で、ではあつたが。

「・・・ミロ。まさかお前、既にカミュに手を——」

「ちよつと待て! 誰が出すか、馬鹿野郎!! ... 冷静に考えてみる、俺がこうして五体満足で生きてるのが、立派な証拠だろうが!!」

「カミュが許したら?」

「・・・あのなあ・・・弟子の教育に、女は駄目で、

男ならいいのか?! それこそ死んでもあいつは首を縦に振らんだろうよ!」

なにしろ、不合理なことがきらいな相棒である。生殖に関係のない恋愛など、『無駄』の一言で切つて捨てるに違いない。

「うーん、確かに、それは一理あるなあ・・・」

「だろ?!」

「でも、それじゃ、本当に誰から教わつたんですかね?」

女、ではない。それは確かだ。聖域に来てからカミュはしばらく対人恐怖症だったし、それがなくなつてからは「修行の邪魔」「弟子の教育に悪い」と色恋沙汰は避けて来た。ましてや、男などではあり得ない。

つまり、カミュがカミュである限り、そんな機会は一度もなかった、ということだ。

「・・・あいつ、器用だから、見よう見まねでそれなりに上手くこなしちまった、つてことないか?」

「それはあり得ませんね。あれはやつぱり経験者の――」

そこまで言いかけて、はつとムウが口を押さえる。

「ちよつと待て、お前、なんでそんなことまで知ってるんだ!!!」

「わーっ!! ミロ! 乱暴はいけませんよ!! 貴方が悪いんですよ!! こっちが恥ずかしくなるくらい生々しく思い出してくれるから・・・!!」

「おい!! ムウ!! なんで俺たちに中継しないんだよ!!!」

「できますか!! 私だつてとてもびっくりしたんですから!! いくらクリステイヌが乗り移つていたとはいえ、あのカミュがあんな・・・!!」

「クリステイヌ、か・・・」

ふと、今迄あきれ顔で成りゆきを見守つていた（というのは正しくないかもしれない、彼は両目を閉じていたので）シャカが、ぼつりと呟いた。

「・・・カミュが知っているはずがない、としたら、やっぱりクリステイヌなんじゃないのか?」

「でも・・・クリステイヌは自分のことを『身持ちの固い娘』だつて言つてるよ?」

遠慮がちに返したのは、先日魔鈴と「オペラ座の怪人」を観にロンドンまで行つて来たアイオリアである。

「だとしたら・・・」

全員の視線が、再びミロに集まった。

「クリステイがラウルに愛を告白した晩に、二人は結ばれた……?」

「……すまない、カミュ。やはり最初にオープンであることを断っておくべきだったか……」

「いいえ、サガ、それに気付かないあのボンクラが悪いんです!」

宝瓶宮のテラスにティーセットを並べながら、カミュは憤然と言った。一つ下の宮の乱痴気騒ぎは、精神障壁を閉ざしていきえ、否応にも頭に響いて来る。勿論それは同様に教皇の間にも届くところとなり、教皇は、久々に仮面をとって時の人の片割れを見舞った、というわけなのだ。教皇が実は数年前に失踪した双児宮の聖闘士であることは、黄金聖闘士だけの秘密である。

「全く……! 十二宮の一をあずかる黄金聖闘士が、精神障壁の有無に気付かないなんて!」

「ミロは随分緊張していたようだったからね……。それに比べると、カミュ、君は随分落ち着いているな?」

「やましいことは全くありませんから。」

客人のティーカップに紅茶を注ぎながらあつさりと言いつけるカミュに、サガは少し笑みを誘われた。ミロもこうだったら、きつとあのように同僚の餌食になることもないのに違いない。

とはいえ、それはミロの方がほんの少し素直であつて、自分のことがよく分かっているからだ、という違いに過ぎないことを、この若い教皇は知っていた。カミュは風のエレメントに属するだけあつて、頭もよく回るし自分の考えを正確に言葉で表現する事が出来る。少なくとも、仲間からはそう思われている。しかし、同じ風のエレメントに属するサガには分かっていた。自分達は、言葉によって思考する。したがって、考えが言葉によって整理されるのは当たり前なのだ。

一方、ミロは、本能によって物事の本質を掴み、一瞬で結論に到達する。言葉は、その途中を他人に無理矢理解させるための手段に過ぎない。ゆえに、風に

支配された連中が理屈をこね回して、まだ思考の過程にいる時に、さつさと最終的な結論に辿り着いてじりじりと待っていることが多いのだ……。

ありがとう、と礼を述べて紅茶に口をつけてから、若い教皇は愉しそうに付け加えた。

「しかし……下では、妙な方向に話が飛び火しているようだよ？ ミロはかなり動揺しているようだが。」

「そうですか？」

カミュはつとサガを睨んで、それから諦めて精神障壁を開けた。もつとも、そんな事をしなくても、これだけ距離が近ければ、ミロが強く感じたり思ったりしたことなどは聞こえてしまうのだが。

しばらく黙って階下の会話に耳を傾け、カミュはうんざりしたように言った。

「……どうやら、私は子爵と一夜を共にしたことになるらしいですね……。」

「否定しに行くかい？」

「馬鹿馬鹿しい！ そんな噂、放っておけば消えます。あとはミロがしばらくその噂でからかわれるだけで、私には実害はありません。」

「まあ、確かに、君にその話題をふっかける勇気のある者はいないだろうが……。」

このクールフェイスに、真剣に睨まれるとかなり恐い。

それを知っている黄金聖闘士達は、ある例外を除いて彼をからかうようなことはしない。ある例外とは、隣にミロがいる場合であつて、何故かミロが側にいると、

この宝瓶宮の主の烈気は若干和らぐのだ。もつとも、

ミロがいれば、そつちをからかう方が面白いので、この例外が生かされる機会は滅多にないのであるが。

「ミロも悪いです。さつさと否定して逃げ出せばよいものを……。」

ふと、カミュが珍しく焦れている事に、サガは気付いた。どうやら、口では平気なようなことを言っている、自分の巻き起こした騒動に幾分か動揺しているらしい。

——これは、早く二人で話す機会を作つてやつた方がよさそうだ……。

サガは、残った紅茶を飲み干すと、つと立ち上がった。言った。

「そろそろ失礼するよ。下の階の連中に、仕事に戻つ

てもらわねばならないからね。」

風が、ゆるやかに聖域の丘を吹き抜けていた。

ミロは、酔い覚ましの水を頭から浴びて、宙を仰いだ。十一月の空は、明るい星が少なく、若干寂しい。そのぼつかりと暗く空いた一角を、水瓶座が大きく占めている。もう数時間もすれば、賑やかな冬の星座が昇りはじめ、このかすかな星の光の印象は払拭されてしまいうだろう。

「・・・さむ・・・!」

ほてった頭を冷やそうと水を被ったら、急に風が冷たく感じられて、寒くなった。馬鹿だな、俺、とひとりごちて、膝を抱え込む。あれから、散々飲まされて、教皇に見つかって怒られた。自分の宮に戻ってから、よせばいいのに、また一瓶空けてしまった。

飲んでしまったのは、最後に辿り着いた結論がちくちくと胸を刺していたからだ。

カミュが、子爵と寝たかもしれない、という結論。

「・・・べつに、それはかまわないんだ・・・」

カミュが誰とどうしようと。それは彼の自由だし、第一あのとき、カミュはクリステイだったのだから。

でも、あの時、戻って来たオペラ座の石段で、カミュははつきりと言ったのだ。「子爵とは何もなかった」と。

「・・・嘘、だったのか・・・?」

思わず口に出して呟いて、ミロはくつくつと笑った。・・・馬鹿馬鹿しい。本当に寝たかどうかもわからないのに、嘘をついたかどうかを考えるなんて・・・馬鹿げてる。

しかし、その馬鹿げていることで、ミロは結局半日も煮え切らない思いをしていたのだった。

静かな丘に、もう一人の影が差したのは、ミロが草の上に乗ったころがってから二十分後、とろとろとまどろみかけたころのことだった。新たにやってきた影は、手に持っていたシヨールを乱暴に寝そべった影に投げると、隣に腰を下ろして言った。

「馬鹿。風邪ひくぞ。」

「・・・馬鹿は風邪ひかないんだよ。」

「口ばかり達者な酔っ払いが・・・」

言葉は悪かったが、新たにやってきた影の声は存外優しかった。ミロは、星明かりに浮かび上がる相棒の姿に向かつて、小さく謝った。

「・・・ごめん。カミュ。」

「何が。」

「俺のへまのせいだ・・・へんな噂が立つちまった。」

「噂が何だ。どうせ、数日で消える」

カミュは、遠い町の灯を眺めたまま動かない。それから、ぼつりと言った。

「・・・問題は、君が、そのへんな噂を信じている、ということだ。」

ぎくりとして、ミロは半分体を起こした。途端に頭蓋骨がきしみをあげて抗議したが、勿論無視する。

「君も、私が子爵と寝たと思ってるんだらう？ そして私が君に、嘘をついたと。」

「カミュ・・・！」

今度こそ、ミロは跳ね起きた。・・・読まれた。考えてみれば、この半日そのことばかり考えていたのだから、当たり前なのだが。

「そういう結論に至った理由は何だ？」

「・・・それは・・・」

その先を言えずに黙り込むミロに、カミュが深い溜息をつく。

「・・・だからお前は、無責任だというんだ・・・」

その呟きは、ミロに聞かせるというよりは、独り言のような響きを持つていた。いや、諦め、というのが一番近かったかも知れない。

やがて、カミュはもうひとつ大きな溜息をつくときを決めたように語り始めた。

「・・・考えてもみる。私は、エリックの舌を噛み切つて、自分も死ぬつもりだったんだ。舌を噛み切ろうとしたら、ディープ・キスになるのは当然だらう？」

「あ・・・！」

「だが、私はそうしなかった・・・その途中で気付いたからだ。エリックが、君であるということに。」

ゆつくりと、ミロは顔をカミュの方に向けた。カミュは、まだ街の灯を見つめている。

「カミュ・・・それって・・・まさか——」

「——覚えがあった。以前、私の半身が北磁極から逃

げ出して、私が小宇宙の殆どを使い果たしてしまつたときに、お前がくれた小宇宙・・私は風のエレメントに属する者だから、君はマニユアル通り、呼吸によつて私に小宇宙を吹き込んだんだ」

聖闘士が極端に小宇宙を使い果たして衰弱したとき、もつとも手つ取り早いのは小宇宙を補充することだと言われる。ただし、他人の小宇宙は基本的に相容れないものであるから、あたかも病人に粥を与えるように、より取り込みやすい形にして与える必要がある。すなわち、火のエレメントに属する者には体熱、風のエレメントに属する者には呼吸、土のエレメントに属する者には肉体の一部、水のエレメントに属する者には血液、というように。

ただし、このようにして与えた小宇宙は、相手に取り込まれ、完全に相手の一部になつてしまふ。それは相手に自分の弱味を握られる事にも繋がるので、普通聖闘士はこういったことをやりたがらない。ミロの小宇宙とカミュの小宇宙が喧嘩しないのは、カミュの小宇宙の側にミロの小宇宙が混在しているからなのだ。その意味では、アフロディーテの「愛の成せる技」

という台詞も、あながち間違いではないのかも知れなかつた。

カミュの台詞は続く。

「そこまでは良かった。そのお陰で私は助かつたのだから、今も感謝している。しかし、君は、その後——」
「・・・あつ・・わかつた!! 思い出したから、それ以上言うな、カミュ!!」

一気に、酒気が醒めた。ミロは、今度は、冷たい冷や汗に全身を濡らすことになつた。・・・そうなのだ。あのシベリアの月明かりの下で、氷のように白かつたカミュの頬にほんの幽かに赤みが差したとき、不意に魔が差したのだつた。ほつとした途端、僅かに濡れて光るカミュの唇が、ぞつとするほどなまめかしく見えた。それで、つい思わず——。

「・・・俺だつたわけか・・あのディーブ・キス・・」
「全く、あれだけ好き勝手しておいて、よくもきれいさつぱり忘れてくれる・・・やつぱりあのとき、お前を叩きのめしておくんだつたな」

ミロの方はうっかり失念していたが、カミュにとつては全く初めての経験である。驚いて、長く記憶に残つ

たとしても、無理からぬことであつた。

「・・・カミュ。」

「・・・何だ。」

カミュは、相変わらずミロの方を見ない。

「・・・その・・・本当に済まない！ 悪かつた！

余計な騒ぎ起こして、君のこと疑つて、その上、昔の嫌な事思い出させたりして・・・」

沈黙。

「とくに、お前の言葉を疑つたことを謝る！ 殴つていいから！」

不意に、カミュは下を向いた。飛んで来る鉄拳を覚悟して、ミロが両目を固く閉じる。

次の瞬間、小さくくつくつと漏れてきた忍び笑いに、ミロはびつくりして目を開けた。カミュが、苦しげに声を殺して笑っている。

「・・・全く・・・君つて奴は、いくら口が殊勝なことを言つても、本心が丸見えなんだからな・・・」

「・・・カミュ？」

全く、ミロの小宇宙は素直だ。口では謝っているくせに、自分と子爵の間に何もなかったことを知って、

小宇宙は喜び輝いている。

そして、カミュもまた、疑われたことへの鬱屈が溶けていくのを感じていた。ミロばかり責める訳にもいかなかった。疑われて腹が立ったのは、嘘つきだと思われたことより、身の潔白を信じてもらえなかったからだ。ミロをさしおいて、他の人間と親密な関係を結ぶことはないのだと、信じてもらえなかったからだ。

たとえこの信頼が、他の黄金聖闘士の囃し立てるような感情とは異なつていても・・・。

「なあカミュ！ 本心丸見えつてどういふことだよ?!」
慌てたミロが、先の殊勝な態度も忘れてカミュの肩をゆさぶる。

その切実な問いには取返さず、カミュは、真つ直ぐにミロを見つめて晴れやかに笑つた。

「この件に関しては、お互いさま、ということにしておこう・・・疑われるのはごめんだが、あの経験がなかったら、私は最後まで君だと気付かないで、君の舌を噛み切っていたかも知れないからな。」

(後書き終わり)

解説

天野 くん

後書きから読む人ですか、貴方。

いや、いいんです。責めちゃいません。アッチもそうですから。まあ、心の臓が「ドキッ」としちまった主さんは、前から順に進めて、気が向いたらまあここに戻って来ておくんなさい。流れに逆らったところで、産卵も出来なきゃ、竜にもなれやしませんからね。さて、それじゃあ、さくさくつと行きやしよう。左手項目の一つを選んで、そこんとこの解説を読んでおくんなさい。

イ・読むのが専門

ロ・実は絵、描いてます

ハ・実は文章書きです

ニ・根性入れたファンなの

選びやしたね。そんじゃあ、行きやしよう。参りやしよう。

イ・読むのが専門

貴方は、赤い髪と金の髪という組み合わせに、通常の日本人に比べて幾分過剰な反応を示す人種ですね。そして、音楽も嫌いじゃない。十代の「美」青少年がなんとなく好きで、眉目秀丽やらなにやらかにやら、とにかく煌びやかな四文字熟語を、日常の必要性に關わらず読めて使いこなせたりする。

けれど、時々、ふつとした瞬間に寂しくなることがある。自分の人生、何処か変じやないかしら、と。

大丈夫です。変ですが、病気ではありません。医者に行く必要ありません。あなたはこの本を手にとって正解です。

錠剤の変わりに、アッチが祥曲さがみさんの言葉を読んで、握り拳にぎりこぶしをそれはそれは硬く握って喜びを嘯かみ締めた言葉をお教えたしやしよう。

「君が愛してくれないのなら、何百人をまきぞえにして俺は死ぬ！」

というグレートさがいかにもミロだと思いませんか？ 自分だけが死ぬとか、相手を殺すとかじゃすま

ないの。他人がどうした！ 俺は不幸せなんだ！ っ
てね。

The PHANTOM of the OPERA 初版 後書より

どうです？ 元氣出ませんか？ アッチはもう、喜びという感情はスルメなのかと思うぐらい何度も嘔み
ましたよ、この言葉。俺、さそり座だけど、こいつよ
りはマシ、つて……。あ、申し遅れましたが天野はさそ
り座なんです。

加えて、何が凄いつて、そんな物騒な超常能力者（成人男性）をグレートとたつた一言で完結させ、尚且つ
賛美まで表明している作家本人だったりするんです
が、どうですかね。

口・実は絵、描いてます

いやあ……、頭ボリボリつと搔いて、ボソツと吐くン
ですけどね、アッチも描くンですよ。多分。いえね、
今じゃなく、昔、描いていた……はず、なんじゃないか
なあ？ そうだったような……ないような……疑問形？

と、まあ、そんな事はうつちやりやして。

さて、この人の作品読むと何やら、描きたくなりま
せんかね、一生懸命なさそり座のお坊ちゃまとか、生
真面目で融通利かないみずがめ座の若ボンとか。何よ
り音楽してしまっている人たちの姿。いやあ、こう、
粹で色つばいンですよね。

それで、ぶち当たったりしませんかね。「音楽」つ
ていう不可視のシロモノに。

アッチは、この人のハナシを読むたんびに、何モン
なんだろう、つて思ったモンです。その道の専門家で、
アッチの頭じゃ理解出来ない難しい事、たくさん沢山
頭の中に入れてる人なんだろうな、とね。

もう十年近く、この「音楽」に託した言葉の数々を
見る為さがみに祥曲さん冊子を求めてるンですが、未だに理
解しているかどうか定かじゃありません。この蘊蓄うんちく、
浮世絵うきゑじゃあこはいかないつてんで、毎回唸うんちま
いやす。

また、祥曲さかみさんは、よく世間様でメジャーな音楽・
奏者をスッパ〜ンツとそれはもう気持ちいいくらい
分かりやすく、お気に召さない旨の告知をなさいます。

「他人がどうした！ 俺は不幸せなんだ！」
 「カラヤンがどうした！ あたしや好きじゃないんだ！」

どうです。やっぱり子供は親の鏡ですねえ。

ハ・実は文章書きです

素晴らしい！ ついでに、物語を完結させる事が出来ますか？ もし出来る方なら、貴方はコツコツ長期持久戦型の真面目気質か、一気呵成の腕力派、ムードに流されがちな社交家ですね。また出来ない貴方は、夢や計画・企画好きの遠視気質か、運命という名の邪魔が入る星の元に生まれた方のようにです。

え？外れてるじゃないか、って？

いやあー困ったなあ…頭からデマカセを指で打ち込んでるだけだから、当たった方が怖いんですけど…。

いえね、何かを完結させる事、やり遂げる事が出来る、というのは、本当に素晴らしい事だと思いませんか？ だから、ほっとけばどんどん長い物語を編み上

げてくれる祥曲さがみさんという作家に、実に惚れ込んでいます。これ本当。自分に無いモノですからね。

誰に強制させられるわけでなく、何かそうさせるモノが彼女にはあるんでしょうね。全てやり尽くせているわけではないだろうけれど、蓋をしてしまわないところがまた、エライ。

文字と絵って、伝えられるものが違うでしょう？

それぞれに得手不得手がある。彼女は常に何を伝えたいのか考え、それを知りたいと思っている。書く事によつて発掘しようとしている。つまり、目的意識を持っているって事ですかね。祥曲さがみさんの中で、この目的はなかなか外せない。そこもまた、エライ。

彼女の書くという行為に対するノウハウは凄いモンです。理路整然としている。小説を書きたいんだけど…と、尋ねれば、すぐに自分はこうしている、あーしているとバカスカ答えが返つて来ますよ。それだけ普段から、真剣に書くという行為を考えている人なんです。

自分も何回も教えるを請うているんですが、いやあー、次こそはメモ取ろうと思います。いつも聞くだけで頭

バンクしてるンで。

二．根性入れたファンなの

……。

今回のこの再録本、Chaconne と The PHANTOM の二本が収録されている。シリアスとコメディ、と思ってしまうているのは僕だけだろうか。

コメディを軽んじているわけではない事は重々断っておきたい。なぜなら、この祥曲^{さがみせいぎ}星祈という作家は、とんでもない「ハズカシガリヤ」だからだ。軽いタツチに誤摩化し、紛らせて、この作家はしばしばサラッと本音を覗かせたりしている。PHANTOM で、二本の原作を縫り合せてのパロディという器用な事をこなしながら、彼女がもつとも心を砕いている場面は、Chaconne より大分設定年齢の高い二人の気の置けない静かな会話にあると睨んでいるのだが、外れだろうか？ 劇中劇から外れた、信頼し合ったモノ同士の日常会話、そこに餓えが見えると言ったら言い過ぎだろうか？ しかし、十年前の作品だ。そんな事もあつ

たかもしれない。まさに青春の只中に居ただろうから。

彼女の作品は、本人が身振り手振りで日常話す様子に比べて大人しい。淡泊だ。けれど、サラサラと読み進む中に、どうしても立ち止まらずには居られない場面に会う。

私にとってのその箇所は、PHANTOM ではミロ(怪人)が、カミュ(クリスティヌ)の「何故自分に固執するのだ？」という問いに対する答え。これは原作もそうであつただろうか？ 記憶に定かでないのだが、「エリック^{※1}になれば解るさ！」と叫ぶ場面だつた。胸が痛んだ。

Chaconne は、彼女がテーマと決めた「人を殺める」というものの扱いが、常に通奏低音のように作品に影響を与えている。

四章以降は愛しみのテーマも被さつて、私は特に好きだ。

原作設定(聖闘士)ものとはいえ、やはり音楽が重要な役割を担っており、五章の始まりを告げた「シヨパンの前奏曲が聞こえる家」などは、非常に緊張感を持つたピアノニッシモとして響いた。

カミュを「シャコンヌに似ている」と表現し、種々の愛情、感情を、「音」が絵の具の如くに筆にのり振るわれている。

彼女の強みは音楽だ。彼女の中には確固として断言出来る音楽に対する美しさが存在し、それが彼女を形成する重要な因子になっている。

十年前、彼女はそれまで見ないようにしてきたという疑問に対し『お互い愛する者を守る為に闘ったのなら、どちらが倒れても許し合えるんじゃないだろうか』とその時点での結論を提示した。今回、この再録集を出すに当たり、

「やはり、この世界を去る前にもう一度扱ってみたい」とは考えています」

と、後書きで自身も結論を楽しみにする風でコメントを載せておられるが、私も楽しみである。

明るく、はじけるように全身を使って会話する双子座の祥曲^{ジエミニニ}さんは、作品中のエピソードを掻集めているとき、よく「恥ずかしい」と言う言葉を叫ぶ。だ

からこんなの書けない、と。

私には何が恥ずかしいのか、サツパリ解らないのだけれど。だから、いつも私は同じ言葉を返す。

「そんなこと言わず、書いて下さいよ、ええ是非に」作家の祥曲^{さがみせいぎ}星祈の羞恥心なんて糞食らえなのだから。さて、大変饒舌になってしまったが、ファンとはそういうモノだと勘弁して下さい。

ね、天野さん？

拙筆 坂口 弘

※1…祥曲^{さがみせいぎ}星祈のオリジナル

さて、ここでコボレ話を一つ。初版ではなんとPHANTOMという語が、FANTOMと堂々と表記されているんです。十年…昔の文章は滅茶苦茶だとお嘆きの祥曲^{さがみ}さん、大丈夫、きちんと成長なさってますぜ。ヨカッタ、ヨカッタ。コレニテラクチャク。

解説 天野 くん

オペラ座の怪人^{ざ かいじん}

2002年8月9日 第1刷 発行

著者 ^{さが}祥 ^み曲 ^{せい}星 ^ぎ祈

訳者 スイーニュ・エール

発行者 保科琴代

〒193-0941 東京都八王子市狭間町
1464-1-2-902

発行所 ^{株式会社}石波書店

定価 四〇〇円

印刷・緑陽社

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed In Japan

